

平成 30 年度

人間生活学総合研究科教授内容

児童学児童教育学専攻

東京家政大学大学院

30 シラバス 児童学児童教育学専攻

(1) 児童学児童教育学専攻(修士課程)

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバスページ)
保育学分野	保 育 学 特 論	2	選	教 授 榎 沢 良 彦	幼専 P1
	保 育 学 演 習	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P3
	保 育 史 特 論	2	選	講師(兼任) 小 久 保 圭 一 郎	幼専 P4
	保 育 心 理 学 特 論	2	選	准教授 堀 科	幼専 P5
	児 童 文 化 特 論	2	選	准教授 是 澤 優 子	幼・小専 P7
	児 童 文 化 演 習	2	選	准教授 森 田 浩 章	幼・小専 P9
保育実践学分野	保 育 実 践 演 習	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P10
	障 が い 児 保 育 特 論	2	選	客員教授(兼任) 松 沢 孝 博	幼専 P11
	保 育 マ ネ ジ メ ン ト 特 論	2	選	客員教授 佐 藤 暁 子	幼専 P12
	保 育 内 容 実 践 研 究 (環 境)	2	選	教 授 大 澤 力	幼専 P14
	保 育 内 容 実 践 研 究 (こ と ば)	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P15
	保 育 内 容 実 践 研 究 (表 現)	2	選	教 授 花 輪 充	幼専 P16
	保 育 内 容 実 践 研 究 (健 康)	2	選	兼任講師 鈴 木 隆	幼専 P17
	保 育 内 容 実 践 研 究 (人 間 関 係)	2	選	講師(兼任) 入 江 礼 子	幼専 P18
育児支援学分野	育 児 支 援 学 特 論	2	選	講師(兼任) 浜 口 順 子	P20
	育 児 支 援 学 演 習	2	選	講師(兼任) 太 田 光 洋	P21
	児 童 福 祉 学 特 論	2	選	教 授 岩 崎 美 智 子	P22
	児 童 福 祉 学 演 習	2	選	准教授 松 本 な る み	P24
	保 育 カ ウ ン セ リ ン グ 特 論	2	選	准教授 武 田 洋 子	幼専 P26
	保 育 相 談 演 習	2	選	兼任講師 金 城 悟	幼専 P27
	家 族 関 係 学 特 論	2	選	兼任講師 平 野 順 子	P28
子ども臨床学分野	子 ども 臨 床 学 特 論	2	選	教 授 宮 島 祐 崇 准教授 阿 部	幼専 P29
	子 ども 臨 床 学 演 習	2	選	准教授 野 澤 純 子	幼専 P30
	小 児 健 康 保 健 学 特 論	2	選	客員教授 岩 田 力	幼・小専 P31
				兼任講師 及 川 郁 子	
	小 児 健 康 保 健 学 演 習	2	選	教 授 高 野 貴 子	幼・小専 P33
				准教授 細 井 香	
	発 達 心 理 学 特 論	2	選	准教授 野 口 隆 子	幼専 P35
	子 ども 芸 術 療 法 特 論	2	選	教 授 池 森 隆 虎	幼専 P36
				准教授 保 坂 遊	
	子 ども 芸 術 療 法 演 習	2	選	教 授 池 森 隆 虎	幼専 P37
准教授 保 坂 遊					
教育実践学分野	教 育 実 践 演 習 (国 語)	2	選	准教授 阿 部 藤 子	幼・小専 P38
	教 育 実 践 演 習 (算 数)	2	選	教 授 家 田 晴 行	幼・小専 P39
	教 育 実 践 演 習 (社 会)	2	選	准教授 二 川 正 浩	小専 P40
	教 育 実 践 演 習 (理 科)	2	選	教 授 大 澤 力	小専 P41
	教 育 実 践 演 習 (音 楽)	2	選	教 授 笹 井 邦 彦	幼・小専 P42
	教 育 実 践 演 習 (図 画 工 作)	2	選	教 授 結 城 孝 雄	幼・小専 P43
	教 育 実 践 演 習 (家 庭)	2	選	兼任講師 平 野 順 子	小専 P44

30 シラバス 児童学児童教育学専攻

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考 (シラバスページ)
学校教育学分野	教 育 学 特 論	2	選	講師(兼任) 藤 井 穂 高	幼・小専 P45
	教 育 行 政 学 特 論	2	選	講師(兼任) 貝 ノ 瀬 滋	幼・小専 P46
	教 育 心 理 学 特 論	2	選	教 授 平 山 祐 一 郎	幼・小専 P47
	学 級 経 営 特 論	2	選	教 授 家 田 晴 行	幼・小専 P48
	道 徳 教 育 演 習	2	選	教 授 走 井 洋 一	幼・小専 P49
	特 別 支 援 教 育 演 習	2	選	教 授 半 澤 嘉 博	幼・小専 P51
	情 報 処 理 演 習 I	2	選	講師(兼任) 織 田 正 昭	幼・小専 P52
	情 報 処 理 演 習 II	2	選	教 授 平 山 祐 一 郎	幼・小専 P54
研究指導	特 別 研 究	10	必	教 授 戸 田 雅 美 家 田 晴 行 岩 崎 美 智 子 榎 沢 良 彦 大 澤 力 笹 井 邦 彦 高 野 貴 子 走 井 洋 一 花 輪 充 半 澤 嘉 博 平 山 祐 一 郎 宮 島 祐 結 城 孝 雄 准 教 授 阿 部 崇 是 澤 優 子 武 田 洋 子 野 口 隆 子 野 澤 純 子 細 井 香 堀 科 森 田 浩 章	P56
	保 育 実 践 研 究	4	必	教 授 戸 田 雅 美	P59
	教 育 実 践 研 究	4	必	教 授 家 田 晴 行 笹 井 邦 彦 半 澤 嘉 博 結 城 孝 雄 准 教 授 阿 部 藤 子	P60

※研究指導は3科目のうち1科目を選択必修。

※教職課程については、免許種別に、備考欄に記載した授業科目から24単位以上を履修する。

授業科目名：保育学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：榎沢良彦
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院修士課程児童学児童教育学専攻における専門的知識修得のためのコースワークの授業として及び研究を行う上で必要な保育学の高度な知識を修得するリサーチワークの授業として保育学特論を講じる。到達目標は以下の事項である。</p> <p>①保育学と自然科学の違いを説明できる。</p> <p>②主観的研究の妥当性を説明できる。</p> <p>③研究者が保育現場に入ることの影響を説明できる。</p> <p>④保育実践における子どもと保育者の体験を生きられている空間の視点で分析できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育の現場において研究的実践ないし、創造性豊かな研究を進めるためには、保育学研究の特質を理解する必要がある。そこで、この授業においては、児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、研究対象である保育実践の存在特性とそれを研究することの意味と方法について検討し、実践研究を「学」として確立するための基礎固めをする。その上で、実践研究の重要な部分である子どもの体験世界を「生きられている空間」の側面から理解することを試みる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：研究対象としての保育の概念</p> <p>第2回：保育（実践）を研究することの意味：実践の一般化、人間精神の自己理解</p> <p>第3回：科学的研究の意味</p> <p>第4回：主観的研究の意味（1）：生態学と臨床の知</p> <p>第5回：主観的研究の意味（2）：主体変様</p> <p>第6回：現象学的アプローチ</p> <p>第7回：解釈学的アプローチ</p> <p>第8回：実践研究の問題</p> <p>第9回：保育現場における研究者の存在</p> <p>第10回：子どもを理解することの意味</p> <p>第11回：保育実践をすることの意味</p> <p>第12回：現象学的空間論</p> <p>第13回：子どもにより生きられている保育空間（1）：基本的特性</p> <p>第14回：子どもにより生きられている保育空間（2）：行動空間の特性</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>事前学習として、各回のテーマに関して、文献（雑誌記事や本）で調べ、分かったことをノートにまとめる(1時間)。</p> <p>事後学習として、テーマについて授業で考えたことをノートにまとめる（1時間）。</p>			

30 シラバス 児童学児童教育学専攻

テキスト：なし

参考書・参考資料等：

榎沢良彦『生きられる保育空間』学文社、O.F. ボルノウ『人間と空間』せりか書房、竹田青嗣『現象学入門』日本放送出版協会、中谷宇吉郎『科学の方法』岩波書店

学生に対する評価：

議論での発言内容などの平常点：40点、課題レポート：60点

授業科目名：保育学演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：戸田雅美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>保育学の論文を読むことによって、保育学とはどのような学問であるのか、また、保育実践との関係について理解する。さらに、これまでの保育学の成果と新たな保育学研究の構築法について学ぶ。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間の生活の重要な柱である、子どもを育てることの学問である、保育学の論文を、批判的に読むことによって、現在の保育学の知見について学ぶ。また、それぞれの論文の構想を理解することによって、保育学の対象領域、また、対象の特徴を踏まえたうえでの、それぞれの研究の目的に応じた研究方法、また、結果から考察を導く過程について学ぶことによって、保育学研究の構築法についても学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：保育学のこれまでの知見とテーマについて 1 歴史的視点から</p> <p>第3回：保育学のこれまでの知見とテーマについて 2 現在の到達点</p> <p>第4回：保育学の対象について 1 「子ども」をめぐって</p> <p>第5回：保育学の対象について 2 「保育」をめぐって</p> <p>第6回：保育学の方法について 1 事例研究</p> <p>第7回：保育学の方法について 2 調査研究の一例としてのインタビュー研究</p> <p>第8回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 1 思想的研究</p> <p>第9回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 2 保育方法の研究</p> <p>第10回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 3 幼児理解の研究</p> <p>第11回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 4 遊び研究</p> <p>第12回：保育実践における反省的思考と研究の在り方 1 実践者の記録を基にして</p> <p>第13回：保育実践における反省的思考と研究の在り方 2 観察者の記録を基にして</p> <p>第14回：保育学研究と保育実践との関係についての総合的な考察</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：事前課題(論文の分析等)を行い、提出したものをもとに議論する。十分な準備をすること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>保育学研究に掲載された論文</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の授業でのレポート50%，議論への参加25%，最終レポート25%</p>			

授業科目名：保育史特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：小久保圭一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>保育所・幼稚園制度と内容および今後の展開・課題について説明し議論ができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>明治初期公的に始まった日本の保育制度。そこで展開された保育内容。それらが明治期以降どのような変遷を辿ったのか。その過程で、現在の保育所と幼稚園の二元化がいかに関制度化されていったのか。一方で、一元化への試みも絶えずなされてきた。これら保育制度と保育内容の変遷を辿り、その背景と意味について検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：明治初期における幼稚園の導入と創設</p> <p>第2回：幼稚園創設期における保育内容と方法</p> <p>第3回：明治期における託児施設の成立とその背景</p> <p>第4回：明治から大正期における託児施設の展開</p> <p>第5回：幼稚園令の公布とその意義</p> <p>第6回：大正期における保育内容と方法の発展</p> <p>第7回：倉橋惣三の誘導保育論</p> <p>第8回：昭和前期における幼稚園と託児所の関係</p> <p>第9回：昭和後期における二元行政のはじまりとその意味</p> <p>第10回：保育要領の刊行とその背景</p> <p>第11回：幼稚園教育要領刊行と保育内容・方法の展開</p> <p>第12回：保育所保育指針刊行の背景とその意味</p> <p>第13回：保育“サービス”への転換と子育て支援事業の展開</p> <p>第14回：認定こども園制度の成立と模索</p> <p>第15回：保育の展望と課題</p>			
<p>準備学習：各授業前に出される課題について調査してくる。授業は基本的に課題の発表・議論を中心に 行なう。また毎授業後には、その授業での学びについて報告書を提出する。</p>			
<p>テキスト：柴崎正行編著「保育内容の基礎」わかば社、柴崎正行編著「保育方法の基礎」わかば社</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業内で適宜提示する。</p>			
<p>学生に対する評価：授業への参加態度40%、課題への取り組み40%、レポート20%の3面から評価する。</p>			

授業科目名：保育心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：堀 科
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>① 乳児期、幼児期前半ならびに幼児期後半の子どもの心の発達が理解できる。</p> <p>② 保育・教育の場、家庭における子どもの発達理解を深め、その育ちに適した保育環境を工夫することができる。</p> <p>③ 子ども一人一人への具体的な援助を考えることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育・教育の場、また家庭の中で子どもの生活や育ちを支えるとき、子どもを理解する手がかりとして保育では心理学が用いられている。とくに乳幼児期は個体として顕著な発達のステージがあり、こうしたステージを理解することは子どもの育ちの姿やその育ちに適した生活のありよう、そして遊びなどの子どもの深い理解と共に、子どもをとりまく事象の理解にもつながる。子どもの姿を心理学的な視点で紐解きながら、実際の子ども一人一人の具体的な援助へ学びを深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：胎児期に関する心理学関連の文献講読と事例</p> <p>第3回：第2回の内容の討議</p> <p>第4回：乳児期に関する心理学関連の文献講読と事例</p> <p>第5回：第2回の内容の討議</p> <p>第6回：幼児期(前期)に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第7回：第6回の内容の討議</p> <p>第8回：幼児期(後期)に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第9回：第8回の内容の討議</p> <p>第10回：児童期に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第11回：第10回の内容の討議</p> <p>第12回：発達支援を必要とする幼児に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第13回：第12回の内容の討議</p> <p>第14回：発達支援を必要とする児童に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第15回：第14回の内容の討議とまとめ</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>各文献について担当者を定める。各担当者はレポートならびにレジュメとしてまとめ、他の学生については関連領域について復習しておく。</p>			
<p>テキスト</p> <p>テキストは特に使用しない</p>			

参考書・参考資料等

内容に応じて適宜呈示する。

学生に対する評価

レポートの内容また討議への参加等により評価する。評価の割合としては、レポート60%、討議への参加40%とする。

授業科目名：児童文化特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：是澤優子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本特論は、「児童文化観の歴史的展開」をテーマに据え、以下の4点を到達目標とする。</p> <p>①児童文化の基本的な概念と歴史的展開を理解する。②各自が担当するテーマにおいて適切な報告書を準備し、分かりやすく発表することができる。③討論において、積極的かつ建設的に参加することができる。④現代の子どもを取りまく児童文化の諸問題と社会の諸要因との関係について、児童文化の歴史的展開をふまえて考察することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化は、「子どもがつくりだす文化」と「大人が子どものためにつくりだす文化」という視座を合わせ持つ概念である。本特論では、児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、子どもの幸せに児童文化の立場から貢献するために、児童文化の基本的な概念と歴史的展開を理解し、文献や資料の読解を通して、近世から近代における子ども観および児童文化観の展開を概観する。児童文化が現代にいたるまで、どのように認識され展開してきたのかを考察することによって、現代の子どもを取りまく児童文化の諸問題と社会の諸要因との関係を、児童文化的な見地から具体的に検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 授業ガイダンス ー授業の目的と進め方の説明ー</p> <p>第2回： 現代社会に生きる子どもと児童文化について ー学生の問題意識報告ー</p> <p>第3回： 児童文化の視点</p> <p>第4回： 児童文化の歴史的展開（1）古代・中世から近世</p> <p>第5回： 児童文化の歴史的展開（2）明治・大正期から昭和初期</p> <p>第6回： 児童文化の歴史的展開（3）1940年代（戦中・戦後）</p> <p>第7回： 児童文化の歴史的展開（4）高度経済成長期から1980年代</p> <p>第8回： 児童文化の歴史的展開（5）1990年代から現在</p> <p>第9回： 児童文化に関する課題の整理（1）子どもの生活文化について</p> <p>第10回： 児童文化に関する課題の整理（2）子どもの遊びについて</p> <p>第11回： 児童文化に関する課題の整理（3）児童文化財について</p> <p>第12回： 児童文化に関する課題の整理（4）子どもの生活とメディアについて</p> <p>第13回： 児童文化に関する課題の整理（5）子ども文化と子どものための文化の均衡</p> <p>第14回： 子ども観と児童文化観 ー総合討論ー</p> <p>第15回： まとめ</p>			
<p>準備学習：授業前は、テーマに関する文献・論文などを読み、要点と自分の意見をまとめておく。（予習1時間）授業後は、授業内容をふりかえり、論点を整理したレポートを提出する。（復習1時間）</p>			
<p>テキスト：児童文化領域に関する受講生の学習状況に合わせて、授業開講後に指示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>山住正巳・中江和恵『子育ての書』全3巻（平凡社東洋文庫、1976）、本田和子『子ども100年のエポック</p>			

ク』（フレーベル館、2000）、フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』（杉山光信他訳、みすず書房、1980）等。その他は、進捗状況を見ながら適宜紹介する。

学生に対する評価：発表(30%)、討論への参加(30%)、レポート(40%)により、総合的に評価する。
また、発表やレポートに対して、到達目標に照らし合わせながらフィードバックを行う。

授業科目名：児童文化演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：森田浩章
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>児童文化の多様性をみつめ、現代の子どもにとって児童文化の果たす役割について議論する。また、児童文化の歴史的位置や価値を見直し、児童文化の分野ごとの理解を深める。また、児童文化を広く「子どもと文化」と理解し、子どもと文化全体を関係づける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化財、すなわち、児童文学、幼児演劇、幼児造形、子供の遊びと玩具、ペープサート、影絵、子ども向けアニメーションとマンガ本、その他、子どもをめぐる「楽しみと面白さ」としての児童文化財の各論を実践論としてレクチャーし、この提案に従って議論する。特に興味を持てる文化財については小論としてまとめられるよう指導する。子どもと劇の先駆者、村上幸雄氏の遺作および遺品を使った資料の読み込み等の研究にも一部参加し、調査研究の実際にも触れていきたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：児童文化とは何か。戦後の児童文化論を中心に。</p> <p>第2回：児童文化、児童文学の近代史、現代史。おとぎばなしから子どもの文学へ。</p> <p>第3回：児童文化と母親たちの児童文化活動。読みきかせと子ども図書館。</p> <p>第4回：各論1 童話、児童文学、幼年文学。</p> <p>第5回：各論2 絵本、近代日本の絵本と現代絵本。マンガと鳥獣戯画。</p> <p>第6回：各論3 絵本、ヨーロッパ・アメリカの絵本。</p> <p>第7回：各論4 アジア・アフリカ・南アメリカの絵本。</p> <p>第8回：各論5 子どもの演劇と親子劇場。村上幸雄と劇の台本。</p> <p>第9回：各論6 子どもの歌とアニメソング、わらべ歌。ペープサート、影絵。</p> <p>第10回：各論7 子どもとあそび、伝承あそびを中心に。</p> <p>第11回：各論8 子どものあそび、プレイパークと現代のあそび。</p> <p>第12回：各論9 コンピューターゲームの意味と役割。アニメーション及びキャラクターについて。</p> <p>第13回：各論10 自然とあそび 土と水と木と草と。</p> <p>第14回：児童文化と保育と教育、教育の中でのあそびと児童文化。</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>心に残る絵本、あそびの種類、アニメ作品をメモして、その作品の出会いの年令をつかんでおくこと。</p>			
<p>テキスト：子どもの文化（月刊誌 子どもの文化研究所発行）および別冊 子どもの文化理論誌</p>			
<p>参考書・参考資料等：子どもの文化（バックナンバー）を活用。および「光の中へ」（つなん出版）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レポート50%、口頭での質疑の内容および口頭での問題提起の内容50%で判定し、70%以上を合格とする。レポートについては、書き直しを行い、基準に達するよう指導する。</p>			

授業科目名：保育実践演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：戸田雅美
授業の到達目標及びテーマ			
<ul style="list-style-type: none"> 保育実践の基盤となる理論に関する把握の仕方（方法論）を学ぶ 			
授業の概要			
<p>幼稚園・保育所ならびに認定こども園等の場で行われている保育実践を対象とした研究の在り方に関する理論とその実際を演習形式にて学ぶ。具体的には、まず、文献や諸資料などから実践研究の方法論とその課題をおさえる。そして、受講生の関心に即しながら、問題（研究目的）を設定し、観察法（参与観察を含む）ならびに面接法（インタビュー）等の方法を以て得られたデータに基づく受講生間の事例検討を介しながら、考察を加えていく。</p>			
授業計画			
第1回：ガイダンス（担当教員の紹介・授業のねらい及び内容と計画に関する説明）			
第2回：保育学における実践研究の意義とデータ収集の方法に関する講義			
第3回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討① 「研究者の立ち位置」に焦点を当てて			
第4回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討② 「問いの立て方」に焦点を当てて			
第5回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討③ 「研究協力者との関係」に焦点を当てて			
第6回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討④ 「考察の観点」に焦点を当てて			
第7回：事例研究の実施に向けた準備① テーマの設定			
第8回：事例研究の実施に向けた準備② 動機の確認・目的の再設定			
第9回：事例研究の実施に向けた準備③ データ収集に関する方法の選択			
第10回：データの収集① 観察法による実践			
第11回：データの収集② 面接法による実践			
第12回：事例検討① 観察法によって採集されたデータの整理と分析			
第13回：事例検討② 面接法によって採集されたデータの整理と分析			
第14回：事例検討③ 考察の展開に関する意見交換			
第15回：授業内容の総括ならびに今後の課題の析出			
準備学習：実践事例を記録して提出できるようにし、それをもとに議論する。			
テキスト：			
なし			
参考書・参考資料等：			
授業内で適宜紹介する			
学生に対する評価：			
授業における参加姿勢（ディスカッションにおける発言の内容を含む）：60% 提出課題の内容：40%			

授業科目名：障がい児保育特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：松沢孝博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>障がいに関わる自明性について検討を加えるとともに、診断名が付いている子どもであっても、一人ひとり独自の子どもとしての理解を深め、育ちにつながる援助を考える。</p> <p>障がいを持っていても主体性のある子どもが子どもとして育つことへの具体的な援助ができるようになること。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>提示してある資料、文献のレジュメを作成し、かつ発表しそれに検討を加える。</p> <p>このことは、研究的実践にスムーズな移行ができると考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：障がいについて —他者から見る障がい—</p> <p>第3回：障がいについて —子ども本人から見る障がい—</p> <p>第4回：子どもの存在について —育つことについて—</p> <p>第5回：子どもの存在について —主体としての育ち—</p> <p>第6回：落ち着きなく動き回る子ども</p> <p>第7回：言葉が出ない子ども</p> <p>第8回：聞くことに不十分さを抱える子ども</p> <p>第9回：視線が合わず他者に全く関心を示さない子ども</p> <p>第10回：身体と運動に困難さを抱える子ども</p> <p>第11回：発達が全体的にゆっくりしている子ども</p> <p>第12回：癇癪を起こしやすい子ども</p> <p>第13回：親への対応</p> <p>第14回：同僚性について</p> <p>第15回：まとめと総括</p>			
<p>準備学習</p> <p>前もって配布されるプリント、文献を読み、レジュメを作成すること（2時間）</p>			
<p>テキスト なし</p>			
<p>参考書・参考資料等 津守真「子どもの世界をどうとらえるか」ランゲフェルド「教育と人間の省察」</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>平常点 30% レポート・発表 50% 小課題 20%</p>			

授業科目名： 保育マネジメント特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：佐藤暁子
授業の到達目標及びテーマ 質の高い幼児教育を核に子育て支援等多様な機能を保育者等職員が協働して遂行するために、保育マネジメントの理論とその具体的方法を関連づけて理解することを目標とする。テーマ「保育の質の向上と協働する組織」			
授業の概要 幼稚園、保育所、そして認定こども園は、幼児期の教育・保育を担う就学前の施設である。平成18年教育基本法改正により第11条「幼児教育について」が新設され、幼児教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものとして規定されている。我が国の激動する社会状況の中で、また、就学前の保育の基本的制度が大きく変わった今日、幼稚園、保育所、認定こども園、そして小規模保育所等地域型保育施設等多様な保育の場は、保育(教育)を核に保護者支援や地域の子育て支援のセンター等多様な機能を遂行し、社会的責任を果たすことが求められている。そこで重要なことは、就学前の保育施設を構成する保育者はじめ多様な専門性を有する職員一人ひとりの人間性・専門性を活かし、協働性を尊重する組織としての力量を高め、カリキュラムマネジメントを通して質の高い保育や子育て支援等の提供を可能にする組織となることである。施設長はじめ組織のリーダーに求められるのが、マネジメント力である。幼稚園・保育所・認定こども園等における保育という営みは、保育理念・方針のもと、保育(教育)課程を編成し、具体的な指導計画の作成、実践、評価(自己評価・外部評価)、改善に組織として取り組み、質の向上に努めている。平成30年より施行される教育要領、保育指針、教育・保育要領においては「カリキュラム・マネジメント」が強く位置づけられる。本授業では、「組織とは何か」をさまざまな事業体や歴史的経緯を通して明らかにし、また、「保育マネジメント(人的資源の運用管理、保育等の質の評価・管理、リスクマネジメント)の在り方」の基本的理論とその具体的方法について探求する。受講者と調整し、保育現場を訪問し、保育の実態等の理解を深める。			
授業計画 第1回：本授業のねらい・保育マネジメントとは① 第2回：保育マネジメントの基本①～組織とは・就学前の保育を担う組織に求められるもの 第3回：保育マネジメントの基本②～質の高い保育等の提供可能な協働する組織となるために 第4回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際①～幼稚園教育要領とマネジメント 第5回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際②～幼稚園の実際 第6回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際③レポートに基づく報告会 第7回：保育所における保育マネジメントの理論と実際①～保育所保育指針とマネジメント 第8回：保育所における保育マネジメントの理論と実際②～保育所の実際 第9回：保育所における保育マネジメントの理論と実際③～レポートに基づく報告会 第10回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際①幼保連携型認定こども園教育・保育要領とマネジメント 第11回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際②認定こども園の実際			

第12回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際③認定こども園の実際
第13回：小規模保育所等地域型保育施設における保育マネジメントの理論と実際④
第14回：まとめ～保育マネジメントの基本的理論とその実態とを関連づけてまとめる
第15回：まとめ～レポートに基づく報告会（プレゼンテーション）

準備学習：次回の授業に向けて資料の収集等準備学習について提示する。

テキスト：必要に応じて資料を配付

参考書・参考資料等：

幼稚園教育要領解説書, 保育所保育指針解説書, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領,
幼稚園における自己評価ガイドライン, 幼稚園における学校評価ガイドライン, 保育所における自己評
価ガイドライン, 祉サービス第三者評価基準ガイドラインにおける各評価項目の判断基準に関す
るガイドライン（保育所版）

学生に対する評価：・授業への準備等取り組み意欲・態度(30%)・討議の場でのコミュニケーション力
(30%)・レポート(40%)を総合して評価

授業科目名： 保育内容実践研究（環境）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：大澤力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本専攻における専門的知識修得のためのコースワーク授業及び研究の一環として幼児が身近な自然環境や社会環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を理解し、その力を子どもたちとの保育に取り入れられる能力を身につけ、さらに提案できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>幼児が周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力およびその力を保育に取り入れることを学ぶ。身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ・身近な環境に自分から関わり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする・身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。これらを中心に環境教育や持続可能性教育(ESD)も視野に入れつつ授業展開する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育内容「環境」とは・保育の実際における「環境」</p> <p>第2回：ものの存在1. 生きているもの（動物）飼育活動や動物探検</p> <p>第3回：ものの存在2. 生きているもの（植物）栽培活動や植物探検</p> <p>第4回：大地とそれをとりかこむもの1. 自然物（大地・水・太陽・風）</p> <p>第5回：大地とそれをとりかこむもの2. 自然現象（天候・気象・一日や四季の変化） まとめ</p> <p>第6回：もののはたらきとエネルギー1. （物理）運動・光・電気・熱・音</p> <p>第7回：もののはたらきとエネルギー2. （化学）色・匂い・味・科学変化</p> <p>第8回：作る活動「手作り工作のいろいろ：紙・木・粘土など身近な素材を活用する」</p> <p>第9回：文字・標識・記号・数量、図形、時間などの概念 まとめ</p> <p>第10回：人間の生活のしくみとかかわり（作る・売り買い・運ぶ・守る・育てる・楽しむ）</p> <p>第11回：人間として生きる心としくみ（家庭・地域社会・道徳）</p> <p>第12回：環境の広がり子どもたち（家庭・学校・地域社会・日本・世界・宇宙）</p> <p>第13回：幼児の環境教育：リサイクル・食育・自然</p> <p>第14回：自然教育・環境教育から持続可能な開発のための教育（ESD）へ まとめ</p> <p>第15回：環境から生活科・総合・理科・社会へと繋がる保幼小連携と子どもの育ち</p>			
<p>準備学習：</p> <p>予習・1時間、復習・毎授業後には、レポートを提出のこと</p>			
<p>テキスト：</p> <p>改訂新版 実践保育内容シリーズ3 環境 編著大澤力（一藝社）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>心を育てる環境教育シリーズ全3巻 大澤力編著（フレーベル館）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業態度30%・提出物35%・筆記試験35%</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究（ことば）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：戸田雅美
授業の到達目標及びテーマ 保育内容「言葉」の指導法について総合的に学ぶとともに、実際の場面での指導法について理解する			
授業の概要 保育内容の領域「言葉」について、実践的に学ぶ。言葉の領域については、特に、小学校以上の教育との関連性も高く、乳幼児期に実際にどのように実践していくかが重要な課題となっている。この授業では、保育所や幼稚園における言葉の指導の実践研究を基に、具体的な指導方法について検討する。また、「生きる力」と言葉との関係についても、学ぶ。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：乳幼児期の言葉の発達1 言葉の準備期から一応の完成期（おおよそ3歳）まで 第3回：乳幼児期の言葉の発達2 就学前までの言葉の発達 第4回：新しい学力観における「言葉」の位置 第5回：幼稚園における保育内容言葉のねらいと内容について1 伝えあうことをめぐって 第6回：幼稚園における保育内容言葉のねらいと内容について2 言葉そのものへの関心 第7回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際1 三歳児 第8回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際2 四歳児 第9回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際3 五歳児 第10回：他の領域との関連 第11回：言葉の育ちを支える環境 第12回：言葉の育ちを支える指導計画 第13回：小学校の学びとの連続性1 課題 第14回：小学校の学びとの連続性2 実際 第15回：まとめ			
準備学習：事前の課題を毎回レポートとして作成し、それをもとに議論を行う。			
テキスト： 保育内容「言葉」 ミネルヴァ書房			
参考書・参考資料等：			
学生に対する評価： 授業内における議論への参加 50% 最終レポート 50%			

授業科目名： 保育内容実践研究（表現）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：花輪充
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本科目では、保育者の表現活動の捉え方や指導法等の現状を踏まえ、その根本原理を深く探求する。中でも、表現活動の内容が子ども自身の生活感や必要感に適い、結果彼らの豊かな表現行為を助長するものとなっているかなど、文献や資料の読み取りに留まらず、事例等を分析しながら問題点を浮き彫りにしていく。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>領域「表現」は、音楽表現、造形表現、身体表現といった具合に、とかく分類的・狭義的に捉えられる傾向があり、「遊び」を通して統合的・自発的に内面を表出しようとする子ども（乳幼児～幼児）の行動パターンと不一致を生じさせることも少なくない。この授業では、そこに着目しながら、乳児期から幼児期に渡る子どもの発達と表現の特徴に焦点をあて、それぞれの時期にふさわしい表現活動について考察するとともに、保育者の受け止めと援助について明らかにしていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業の概要及び授業展開について</p> <p>第2回：人間と表現について ・表現ということ ・表現の発達</p> <p>第3回：表現と「表現」について ・遊びと表現 ・領域「表現」の捉え方</p> <p>第4回：子どもと表現活動 ・表現活動と内面形成</p> <p>第5回：表現活動の役割 ・健全育成と表現活動 ・指導者の役割</p> <p>第6回：造形表現の視点から ・作る ・描く</p> <p>第7回：音楽表現の視点から ・歌う ・奏でる</p> <p>第8回：劇表現の視点から ・演じる ・扮する</p> <p>第9回：統合的表現について ・ごっこあそび ・劇遊び</p> <p>第10回：保育者と表現① ・活動と行為の視点から</p> <p>第11回：保育者と表現② ・body for self と body for others</p> <p>第12回：保育者と表現③ ・遊びと表現活動</p> <p>第13回：表現活動の実際① ・幼稚園における事例より</p> <p>第14回：表現活動の実際② ・保育所、児童館における事例より</p> <p>第15回：遊びから学びへ ・保育者の受け止めと援助</p>			
<p>準備学習：第2回の授業までにテキストの第1章（第1節～第6節）を、第5回の授業までにテキストの第2章（第1節～第5節）を、第10回の授業までに第6章（第1節～第8節）を読み、授業計画に沿ってノート整理し、授業後はレポートにまとめる。</p>			
<p>テキスト：「保育・幼児教育シリーズ 表現の指導法」玉川大学出版部</p>			
<p>参考書・参考資料等： そのつど授業内で紹介する</p>			
<p>学生に対する評価： 協議及び実技の参加（30%） プレゼンテーション（30%） レポート（40%）</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究（健康）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名： 鈴木 隆
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>子どもの心身の発達や運動発達について理解し、説明できる。</p> <p>子どもの健やかな心身の発達をささえる保育者の役割や環境構成などについて、実践的に考案できる。</p> <p>子どもが楽しく体を動かす遊びを、工夫し作り出すことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育内容の領域「健康」について、実践的に学修する。この領域は体を動かす運動的遊びにとどまらず、生活習慣の獲得や安全教育、食育など、保育実践に照らして考えると多岐にわたる保育内容が対象となる。この授業ではこうした幅広い内容を前提としつつ、子どもの育ちを多面的にとらえて実践のあり方について考察していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業の概要及び授業展開について</p> <p>第2回：乳幼児の体の発達について</p> <p>第3回：乳幼児の心の発達について</p> <p>第4回：乳幼児の運動発達について</p> <p>第5回：運動能力の発達と運動能力検査について</p> <p>第6回：子どもに必要な動きとは</p> <p>第7回：幼児期運動指針について</p> <p>第8回：生活習慣の獲得と保育</p> <p>第9回：睡眠と保育</p> <p>第10回：食育と保育</p> <p>第11回：安全教育と保育</p> <p>第12回：保育実践に学ぶ さまざまな環境</p> <p>第13回：保育実践に学ぶ 保育者の役割</p> <p>第14回：保育実践に学ぶ 行事のあり方</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>各回ごとに課題となる内容を提示するので、それを事前に取り組んだ上で参加すること。できる限り実践を想定して課題へ取り組み、自分なりに考えをまとめるよう努力すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>『保育実践を支える 健康〔改訂版〕』福村出版、2018年</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>その都度授業にて紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業内での課題成果および討議への参加態度（50%）、最終レポート（50%）</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究（人間関係）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名： 入江 礼子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>幼児を取り巻く人間関係を巡る現代的課題を理解すると同時に幼児教育で保障すべき教育内容に関する知識を身に付ける。</p> <p>保育内容「人間関係」の指導法について総合的に学ぶと同時に幼児の発達にふさわしい主体的・対話的で深い学びを実現する保育実践を構想し、実践する力を身に付ける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>現代の幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会的要因について理解し、幼児教育で保障すべき教育内容についての知識を身に付ける。さらに幼稚園教育要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容について、具体的な実践事例を検討することを通じて幼児の姿と保育実践を関連させて理解を深める。そのうえで主体的・対話的で深い学びを実現する保育実践を構想し実践する力を演習を通して身に付けていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： ガイダンス（保育の原点としての幼児理解について及び授業のねらいと計画等について）</p> <p>第2回： 現代社会と幼児の人間関係 －家庭・地域での経験と幼児教育に期待されるもの</p> <p>第3回： 乳幼児期の人間関係の発達① 3歳未満児について －施設保育（保育所・こども園等）での育ち、家庭での育ち</p> <p>第4回： 乳幼児の人間関係の発達② 3－5歳児について －集団保育（幼稚園・保育所・こども園等）での育ちを中心に</p> <p>第5回： 幼稚園における領域「人間関係」のねらいと内容について</p> <p>第6回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際① 3歳未満児</p> <p>第7回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際② 3歳児</p> <p>第8回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際③ 4歳児</p> <p>第9回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際④ 5歳児</p> <p>第10回： 幼稚園教育要領における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「人間関係」</p> <p>第11回： 幼児期の「道徳性・規範意識の芽生え」の育ち ー今、なぜ「道徳性・規範意識」か</p> <p>第12回： 幼児期の「協同性」の育ち ー今、なぜ「協同性」か</p> <p>第13回： 幼児期の「社会生活との関わり」 今、なぜ「社会生活との関わり」か</p> <p>第14回： 第10回から13回のテーマについての考察と討論</p> <p>第15回： 授業の総括と今後の課題</p>			
<p>準備学習：事前学習として課題レポートを作成する。事後学習としては授業内容をまとめること。</p>			
<p>テキスト：酒井幸子他「保育内容『人間関係』」萌文書林</p>			

参考書・参考資料等：

幼稚園教育要領解説・保育所保育指針解説・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

学生に対する評価：

授業における議論への参加 30% 各回の課題レポート30% 最終レポート 40%

授業科目名： 育児支援学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：浜口 順子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>目標：院生一人一人が自らの「育児支援」観を構成する情報や価値観に気づき、現実に即した育児支援の在り方を批判的に検討する力を養う。</p> <p>テーマ：人間社会において育児することの意義を問う</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人が育児する意義について根本的に問うために、マスコミや学問における通説、言説を概観し、それらが歴史的にいかんにか形成されてきたのか、海外と比較して日本の特殊性はどんなものかなどを問い、育児や育児支援というものへのイメージを主体的に再構成することを目指す。</p> <p>そのために、ディスカッションや自主研究・発表をとおして主体的対話的な授業を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： オリエンテーション 人が子育てする意味を考える</p> <p>第2回： マスコミで問題となっている日本の育児問題</p> <p>第3回： 親とは誰のことか（生物学的、法的、社会学的、心理学的、保育学的）</p> <p>第4回： 子どもの権利条約における親・保護者</p> <p>第5回： 育児支援の歴史1（明治期）</p> <p>第6回： 育児支援の歴史2（大正～戦前）</p> <p>第7回： 育児支援の歴史3（戦後）</p> <p>第8回： 現代の親・保護者の問題（データを読む）</p> <p>第9回： 現代の親・保護者の問題（ディスカッション）</p> <p>第10回： 海外の育児支援1（欧米）</p> <p>第11回： 海外の育児支援II（アジア他）</p> <p>第12回： メディアの中の育児支援</p> <p>第13回： 育児支援に関する自主研究発表1</p> <p>第14回： 育児支援に関する自主研究発表2</p> <p>第15回： まとめ</p>			
<p>準備学習：人間が育児することと「支援」というワードがどういう関係をもつのか、院生各自にテーマを立てて、関心のある記事をネットや雑誌などから収集しファイリングする。</p>			
<p>テキスト：特に指定しない。必要に応じて資料等配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 加藤邦子・浜口順子ほか編『子どもと地域と社会をつなぐ家庭支援論』福邑出版、2015年</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>リアクションペーパー30%、自主研究等への参加態度40%、最終レポート30%の割合で評価する。</p>			

授業科目名： 育児支援学演習	単位数：2単位	選択	担当教員名：太田光洋
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>現代社会における育児支援の意義と役割について理解し、育児支援をめぐる施策や事業、実践現場での諸課題について資料収集と議論を通して、育児支援のあり方とその実践を構想・実現する専門的能力を習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、育児支援に関する政策、事業とその実践事例や課題の検討を通して、社会的ニーズをふまえ子どもの最善の利益に資する育児支援の基本理念とその実践のあり方について学びを深める。また、育児支援を園内や地域での連携や協働のあり方について、園経営、保育者のキャリアパスという観点から検討する。この授業の進め方としては、育児支援に関する実践事例、実践記録や論考、データ等を収集、報告し、議論を中心に展開し、研究的実践の基礎力を身につける。また、必要に応じて実践現場の観察、実践者へのインタビューなどの機会を設ける。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション、「育児支援」とは何か</p> <p>第2回：育児支援の成り立ちと背景</p> <p>第3回：わが国の保育施策と育児支援の変遷</p> <p>第4回：育児支援の今日的課題</p> <p>第5回：現代の子育てと母子関係</p> <p>第6回：求められる支援内容と課題</p> <p>第7回：地域子育て支援センター等における育児支援</p> <p>第8回：保育所・幼稚園・認定こども園における育児支援（在園児の保護者への支援）</p> <p>第9回：保育所・幼稚園・認定こども園における育児支援（地域の保護者への支援）</p> <p>第10回：保育者の専門性と育児支援の具体的内容、保育を基礎とした育児支援</p> <p>第11回：育児支援にかかわる地域や専門家の協働</p> <p>第12回：支援者の育成、支援とキャリアパス</p> <p>第13回：支援者が抱える悩み</p> <p>第14回：保育者を支える支援ネットワーク、支援者支援</p> <p>第15回：育児支援の充実のために求められる組織運営</p>			
<p>準備学習：予習1時間。毎回の授業に関する資料収集と整理、レジュメ作成。復習1時間。</p>			
<p>テキスト：『子育て支援の理論と実践』（保育出版会）、その他随時資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：『現代の子育て・母子関係と保育』（ひとなる書房）、『よくわかる子育て支援・家庭支援論』（ミネルヴァ書房）</p>			
<p>学生に対する評価：レジュメ作成30点、授業内での発表と討論40点、レポート30点。</p>			

授業科目名：児童福祉学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岩崎美智子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では、二つのテーマについて社会学的な観点から講義する。ひとつは、現代社会に生きる子どもと家族の問題とそれらに対する福祉的対応、保育者の援助について検討する。二つ目は、保育者の生活史について、ライフヒストリー・ライフストーリー等の手法をもちいて考察する。受講者は、資料やデータ、語りなどを素材として議論を重ねながら、問題の発見、分析の方法を理解し、特定の課題を探究していく力を修得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>上記二つのテーマについて、毎回問題提起をするが、受講者とともに討議しながら授業を進める。前半は、①子どもや家族が直面している問題の実態把握と検証、②子どもや家族を支える援助者としての保育者の困難や感情労働、および「ケアすること」や「支援すること」についても整理し、問い直しを試みる。後半は、保育者の実践や人生について、ライフヒストリー研究やライフストーリー研究に学びながら、文献や調査データ、語りをもとに論じる。保育者たちの保育・養護実践や人間性を多面的に理解することをめざす。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代社会における子どもと家族の問題</p> <p>第2回：その1 子ども虐待</p> <p>第3回：その2 子どもの「自立」</p> <p>第4回：問題への対応—ケアと支援</p> <p>第5回：その1 レジリエンスとエンパワメント</p> <p>第6回：その2 児童養護施設における自立支援</p> <p>第7回：その3 保育所における親子支援</p> <p>第8回：その4 援助することの難しさ—感情労働について</p> <p>第9回：その5 「ケア」再考</p> <p>第10回：ライフヒストリーとライフストーリー</p> <p>第11回：その1 保育者の戦中と戦後</p> <p>第12回：その2 戦後の保育所保母の実践</p> <p>第13回：その3 戦後の施設保母の実践</p> <p>第14回：その4 現代の保育者たち</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習1時間。予習としては、翌週の講義のために資料を事前配布するので、必ず目を通し質問を考えておくこと。復習としては、その日の講義のポイントや議論になった点を整理しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特に指定しない。随時、資料を配布する。</p>			

参考書・参考資料等：

上野千鶴子『ケアの社会学』太田出版、2011年

学生に対する評価：

討議への意欲・発表等30%、予習・復習30%、レポート・課題40%として総合的に判断する。

受講者の発表や課題・レポートについては、授業内にコメントする。受講者が意欲をもって積極的に議論に参加することを期待する。

授業科目名： 児童福祉学演習	単位数：2単位	選択	担当教員名：松本なるみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では、児童福祉領域における児童養護の今日的な問題を扱う。到達目標は以下の4点である。</p> <p>①児童養護問題について当事者である子どもだけではなく、その家族や地域社会、制度や施策といった複数の視点からの確に捉えて述べることができる。②児童養護問題発生の背景について社会の状況もふまえて指摘することができる。③児童福祉の「対象」としての子どもではなく「権利主体」としての子どもという児童福祉法に示された子どもの位置づけを理解し具体化した支援について提案することができる。④レジュメを作成しわかりやすく説明すること及び積極的に討議に参加することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童養護の今日的な問題における6つのテーマを中心に演習を進めていく。基本文献や資料をもとに、現代の子どもを取り巻く環境や社会状況と関連させながら児童養護問題の現状を把握し、複数の視点から検討し理解を深める。また、平成28年改正の児童福祉法や6つのテーマに関する基本文献の解説（教員）・先行研究の講読（院生）、報告者と教員・院生間の議論をとおして、子どもが育つプロセスを理解し子どもを「権利主体」とした具体的な支援についても考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業の進め方・内容に関するガイダンス</p> <p>第2回：児童養護問題の現状</p> <p>第3回：基本文献の解説・先行研究の講読（1）児童虐待</p> <p>第4回：第3回の討議</p> <p>第5回：基本文献の解説・先行研究の講読（2）子どもの貧困</p> <p>第6回：第5回の討議</p> <p>第7回：基本文献の解説・先行研究の講読（3）社会的養護を必要とする子どもと家族</p> <p>第8回：第7回の討議</p> <p>第9回：基本文献の解説・先行研究の講読（4）施設養護（児童福祉施設）</p> <p>第10回：第9回の討議</p> <p>第11回：基本文献の解説・先行研究の講読（5）家庭養護（里親・ファミリーホーム）</p> <p>第12回：第11回の討議</p> <p>第13回：基本文献の解説・先行研究の講読（6）子どもの権利擁護</p> <p>第14回：第13回の討議</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>事前学習は、各回のテーマについて報告する担当者を決めるので、レジュメの作成を課題とする。報告担当ではない学生も課題文献を読んでおくこと。事後学習は、報告を聴いて気づいたこと、討議をとおして考えたことを毎回記録して、最優回のまとめの授業で報告できるようにしておく。</p>			
<p>テキスト：テーマに応じて文献案内と資料を配布する。</p>			

参考書・参考資料等：授業時に適宜提示する。

学生に対する評価：

授業・討議への参加50%、レジュメ作成等提出課題の内容50%

授業科目名： 保育カウンセリング特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：武田洋子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>他者からの相談を受けるなどにより他者を支援するためには、支援意義の明確化、自己と支援対象の理解、支援態度や技術の習得の3つが必要である。従ってこの授業では、保育者の行うカウンセリングの特性とその意義を理解すること、自己と他者（親）に関する理解を深めること、相談を受ける時に必要な態度と技術を習得することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育者による保護者支援が業務の一つとして重視されるようになってきている。保育者の専門性や強みを生かして、日常生活の中で保護者への支援を行うために必要となる理論と方法を扱う。授業は、演習（グループワーク、ロールプレイ）や事例を多く取り入れながら進める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育者ならではのカウンセリングとは何か (1)心理職との相違点</p> <p>第2回：保育者ならではのカウンセリングとは何か (2)保育者の専門性と強みを生かした支援</p> <p>第3回：親に対する理解を深める (1)親の発達</p> <p>第4回：親に対する理解を深める (2)親役割</p> <p>第5回：親に対する理解を深める (3)アタッチメント理論</p> <p>第6回：親に対する理解を深める (4)親との関係づくり</p> <p>第7回：自己に対する理解を深める (1)自己理解を深めるために役立つ視点</p> <p>第8回：自己に対する理解を深める (2)自己理解のワークその1</p> <p>第9回：自己に対する理解を深める (3)自己理解のワークその2</p> <p>第10回：実践のための技術を学ぶ (1)身につけたい姿勢と技術その1</p> <p>第11回：実践のための技術を学ぶ (2)身につけたい姿勢と技術その2</p> <p>第12回：実践のための技術を学ぶ (3)身につけたい姿勢と技術その3</p> <p>第13回：実践のための技術を学ぶ (4)他職種との協働や関係機関との連携</p> <p>第14回：保育カンファレンスについて学ぶ</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習： 電車の車内や地域などで、親子の様子を観察するよう心がける。その際、子どもの視点だけでなく、親の視点からも見るよう意識するとよい。</p>			
<p>テキスト： なし</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業中に適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点（授業への取り組みの積極性）30%、授業中に課すリアクションペーパー30%、課題レポート40%</p>			

授業科目名： 保育相談演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：金城 悟
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>保育相談が必要な保育現場の状況分析をもとにケアワーク、ケースワーク、カウンセリング、ケースカンファレンス等の基礎的な支援技術を学修した上で、保育者の専門性、保育者の協働等について理解を深め、探究できる能力を身につけていく。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育現場において保育相談が必要とされる現代社会の現状と課題を理解し、保育相談に関する基礎的知識及び支援技術を実践的に学ぶ。さらに、保育現場におけるフィールドワークを通して保育相談の展開を体験し、保育相談の目的と保育者の役割について実践課題の分析と議論を重ねながら理解を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 保育相談の概要の理解</p> <p>第2回：保育相談の対象と課題</p> <p>第3回：子どもの最善の利益の実現と人権を守ることの意義</p> <p>第4回：保育相談のプロセス①ケースワークの基礎理論</p> <p>第5回：保育相談のプロセス②ケースワークの実践</p> <p>第6回：保育相談のプロセス③保護者支援の計画・記録・評価</p> <p>第7回：フィールドワーク①幼稚園における保育相談</p> <p>第8回：フィールドワーク②保育施設における保育相談</p> <p>第9回：フィールドワーク③子育て支援施設における保育相談</p> <p>第10回：保育カンファレンスの基礎理解</p> <p>第11回：保育カンファレンスにおける保育者の協働</p> <p>第12回：保育相談における事例検討①障がいのある子ども</p> <p>第13回：保育相談における事例検討②被虐待児</p> <p>第14回：保育相談における事例検討③保護者に難しさのある子ども</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>指定された事前課題について取り組み、授業における討論に備える。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>適宜紹介する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>事前学修・事後学修(20%)、授業への参加(30%)、演習課題(50%)</p>			

授業科目名： 家族関係学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：平野順子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>乳幼児・児童とその家族を取りまく様相は、時代によって変化している。現代においては、家族の多様化・価値観の多様化と相まって、さまざまな家族関係が存在する。その現状とそれに配慮した保育・教育、保護者支援を学び、家族を見つめる洞察力・研究能力、さらに実践の場における応用力を身に付けることができることが本科目の目標である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>乳幼児・児童とその家族を取り巻く問題について、具体的な事例を元にして、さまざまなデータや対応、支援の実際について検討する。また、子どもと家族を支える地域資源へ実際に赴き、現場で抱える家族関係の現状について把握し、その支援について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（授業の進め方と学生の興味関心について）</p> <p>第2回：現代の家族関係</p> <p>第3回：今日の乳幼児と家族を取り巻く社会環境</p> <p>第4回：今日の児童と家族を取り巻く社会環境</p> <p>第5回：政府統計データから見た日本の家族とその支援</p> <p>第6回：子どもと家族を支える地域資源 ①子育てを支える</p> <p>第7回：親としての発達</p> <p>第8回：子どもと家族を支える地域資源 ②妊娠中から支える</p> <p>第9回：子どもの居場所</p> <p>第10回：子どもと家族を支える地域資源 ③児童の放課後を支える</p> <p>第11回：事例検討 ①子どもへの対応</p> <p>第12回：事例検討 ②保護者への対応</p> <p>第13回：諸外国における子育て支援</p> <p>第14回：日本の家族支援のこれから</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>基本的に、毎回、授業の準備学習（課題、発表準備）があります。その準備をもとに討論によって授業を進めますので、必ず準備をしてください。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>授業中に指定します</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に指定します</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の授業の準備、発表（50%）、授業での討論（20%）、実践発表（30%）の総合評価</p>			

授業科目名： 子ども臨床学特論	単位数： 2単位	選択 (幼専)	担当教員名： 宮島 祐・阿部 崇 オムニバス
授業の到達目標及びテーマ： 子どもの発達と行動特性についての理解を深め、列挙することができる。 子どもを育む上で有用となるスキルと関連職種との連携の実際を修得する。			
授業の概要： 昨今、幼児期から学齢期を含め「問題行動・気になる子」が増えていると話題になっている。児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、この講義では医学的見地と教育的見地の両面からオムニバス方式にて学びを深め、連携の実際を習得する。前期は医学的見地から神経発達症群の概念に至った経緯、および保育・教育の現場で問題となっている現状を鑑み、事例を交えての理解と対応について学修する。後期は教育的見地から知的障害児教育の歴史的変遷に加え、事例を取り上げて「個別の指導計画」の作成、さらに教材・教具の作成により理解を深める。また実際の授業を視聴し、授業分析の視点や評価の視点について検討する。講義時にはミニレポートの作成やグループディスカッションを取り入れて、知識の定着を図る。			
授業計画 第1回：微細脳機能障害症候群から神経発達症群（発達障害）に至る歴史的変遷（宮島） 第2回：乳幼児期に「気になる子」とは？（宮島） 第3回：学童期の「問題行動」とは？（宮島） 第4回：注意欠如・多動症の検査と評価（宮島） 第5回：自閉スペクトラム症の検査と評価（宮島） 第6回：発達性協調運動障害の検査と評価（宮島） 第7回：神経発達症群（発達障害）の治療の実際（宮島） 第8回：知的障害児教育の歴史的変遷（阿部） 第9回：「個別の指導計画」の実際・作成（阿部） 第10回：知的障害児教育における教材・教具の実際（阿部） 第11回：知的障害児教育における教材・教具の製作（阿部） 第12回：知的障害児教育における授業研究（阿部） 第13回：授業研究における分析の視点とその評価（阿部） 第14回：知的障害児教育における「合理的配慮」（阿部） 第15回：教育機関と医療機関の連携の実際（宮島・阿部）			
準備学習：毎回の受講前に図書館等で下記参考書・資料に目を通しておくこと。			
テキスト：特に指定しない。			
参考書・参考資料等：講義の進行状況に合わせて適宜提示する。 宮島担当分「注意欠如・多動症の診断・治療ガイドライン第4版（じほう）」「精神障害の診断と統計マニュアル第5版（DSM-5）」			
学生に対する評価： 授業への参加態度30%、課題への取り組み40%、レポート30%の3面から評価する。			

授業科目名：子ども臨床学演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：野澤純子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>保育所や幼稚園などの保育現場における具体的な事例から保育臨床相談の基本的な概念を整理する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>この授業では、保育所や幼稚園などの保育現場で出会う、様々な臨床的な問題に取り組む際に問題となる課題について、具体的な事例を検討することを通して、保育臨床相談の基本的な概念を整理し、園内外での取り組み方についてその基本的な考え方について学んでいく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育臨床相談とは</p> <p>第2回：今保育臨床相談が求められている社会的背景について</p> <p>第3回：保育臨床相談に取り組むための園内の体制づくりと進め方</p> <p>第4回：保育臨床相談におけるコーディネーターの意義と役割</p> <p>第5回：保育臨床相談における記録とカンファレンスの在り方</p> <p>第6回：保育臨床相談における保護者との連携の進め方</p> <p>第7回：保育臨床相談における支援員との連携の取り方</p> <p>第8回：保育臨床相談における地域の専門家との協働的な連携の在り方</p> <p>第9回：保育臨床相談の事例検討（1）気になる子への取り組み</p> <p>第10回：保育臨床相談の事例検討（2）発達障がい児への取り組み</p> <p>第11回：保育臨床相談の事例検討（3）園内の保育の見直しへの取り組み</p> <p>第12回：保育臨床相談の事例検討（4）地域の専門家との協働的な取り組み</p> <p>第13回：保育臨床相談の事例検討（5）保護者支援への取り組み</p> <p>第14回：保育臨床相談の事例検討（6）小学校との協働的な取り組み</p> <p>第15回：保育臨床相談の事例検討（7）地域の人々のサポート</p>			
<p>準備学習：</p> <p>毎授業前に課題を出しておくので、それについて調べてくる。また毎授業後にはその授業での学びについて報告書を提出する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>柴崎正行編著「障がい児保育の基礎」わかば社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>未定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への参加態度 40%，課題への取り組み 40%，レポート 20%の3面から評価する。</p>			

授業科目名：小児健康保健学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：岩田力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>乳幼児、学童、生徒の心身の発達の過程を把握し、正常とは何か健康とは何かについて考察し評価できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>乳幼児・小児期の子どもたちの健全な発育発達にかかわるさまざまな生物学的現象をIllingworthの名著Normal Childの輪読を通して検討していく。またそうした検討を通して、乳幼児・小児期の子どもたちの発育、発達を支援する保健学的な視点についても、具体的に考えていく。例えば受講生が経験した子どもの発育や発達に関わる問題について、受講生間の議論を通して考察を加えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：授業計画の説明。ノーマルチャイルド輪読の割り振り。</p> <p>第2回：正常な母乳栄養について。</p> <p>第3回：正しい母乳栄養と離乳。</p> <p>第4回：母乳栄養の諸問題、人工栄養と離乳。</p> <p>第5回：「授乳・離乳支援ガイド」策定について。</p> <p>第6回：受講者の学部において学んだ小児保健学の知識の整理①。</p> <p>第7回：受講者の選択した章①。</p> <p>第8回：受講者の選択した章②。</p> <p>第9回：種々の身体症状。</p> <p>第10回：受講者の学部において学んだ小児保健学の知識の整理②。</p> <p>第11回：受講者の選択した文献抄読①。</p> <p>第12回：受講者の選択した文献抄読②。</p> <p>第13回：発達の評価と診断。</p> <p>第14回：受講者の経験を通して、子どもにおける正常とは何かを議論、考察する。</p> <p>第15回：全体のまとめ。</p>			
<p>準備学習：子どもの保健の教科書を通読しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>R.S. イリングワース著、山口規容子訳、ノーマルチャイルド メディカル・サイエンス・インターナショナル</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>特になし。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点30%、文献の読解力30%、相互の議論20%、レポート20%。</p>			

授業科目名： 小児健康保健学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：及川郁子
授業の到達目標及びテーマ 子どもの健康の維持・促進に関わる基本的概念を整理し、子どもや親、家族の健康支援者となるための実践能力を高めるとともに、健康課題に対する研究的視点を持つことができる。			
授業の概要 疾病や障がいの有無に関わらず、子ども一人ひとりの健康を維持・促進することは、子どものLifeを豊かにするものである。本授業では、子どもの健康に関わる基本的概念について理解を深めるとともに、子どもの発育各期における心身の特徴および身体的側面からの健康状態をアセスメントする視点を明らかにする。また、実践現場での事象や文献を通して、子どもの健康に影響する要因を家族、地域、社会との絡みの中で検討し、具体的支援内容について考える。			
授業計画 第1回：オリエンテーション：コースワークの説明 第2回：子どもと健康 第3回：子どもの権利と健康 第4回：プライマリケアとヘルスプロモーション 第5回：健康生活とセルフケア 第6回：健康教育とプレパレーション 第7回：乳児期にある子どもの健康 第8回：乳児期にある子どもと家族の健康支援 第9回：幼児期にある子どもの健康 第10回：幼児期にある子どもと家族への健康支援 第11回：学童期にある子どもの健康 第12回：学童期にある子どもと家族への健康支援 第13回：思春期にある子どもの健康 第14回：思春期にある子どもと家族への健康支援 第15回：まとめ			
準備学習：コースワークに沿って授業準備、資料作成を行う。 既習の子どもの保健に関する内容を復習しておく。			
テキスト：特に指定しない			
参考書・参考資料等：適宜提示する			
学生に対する評価：セミナー資料と討議への参加70%、レポート30% *本科目は通年で実施する予定（隔週開講）。内容は履修生の状況により変更することがある。			

授業科目名： 小児健康保健学演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：高野貴子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康な子どもの成長と発達、疾病や障害をもつ子どもの理解を深め、支援方法を考えることができる。さらに日本の子どもを取り巻く環境とその問題点を考察できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>小児保健に関する知識をさらに深め、人が生まれて育つ過程とその健全な育成を妨げる諸問題を、文献や討論などを通して学究する。多角的に子どもの健康問題にアプローチできる学習を行う。概説の後、各人がテーマを調べ、発表する形式を取る。疾病や障害をもつ子どもの問題点を知り、支援方法を述べるようにする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：イントロダクション、到達度チェック</p> <p>第2回：文献検索の方法、学術論文の規定、課題の選択</p> <p>第3回：健康指標、課題の発表</p> <p>第4回：母子健康手帳</p> <p>第5回：プレゼンテーションと討論 (1)</p> <p>第6回：障がい</p> <p>第7回：先天異常と遺伝</p> <p>第8回：染色体異常、ダウン症候群</p> <p>第9回：出生前診断、生殖補助医療</p> <p>第10回：プレゼンテーションと討論 (2)</p> <p>第11回：予防 (感染症、がん、事故その他)</p> <p>第12回：プレゼンテーションと討論 (3)</p> <p>第13回：学術論文検索</p> <p>第14回：学術論文抄読</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：予習 1 時間、復習・ノートの整理 1 時間</p> <p>(予習) 授業前に各人が選んだ課題を調べてくる。プレゼンテーションの準備を進めておく。課題終了時にレポートを提出する。(復習) レジユメを作成する。</p>			
<p>テキスト：授業内でそのつど紹介する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：国民衛生の動向 (最新版)、 「小児科学」 第10版 (文光堂)</p>			
<p>学生に対する評価：予習・復習 (10%)、課題への積極的取り組み及びレポート (60%)、発表ならびに他者の発表への建設的質問 (30%)</p>			

授業科目名： 小児健康保健学演習	単位数： 2 単位	選択 (幼・小専)	担当教員名： 細井香
授業の到達目標及びテーマ 子どもの健康に関する包括的な知識を修得し、子ども・保護者支援の実践者としての専門的知識と能力、探求心を獲得する。			
授業の概要 小児健康保健学特論での知識をさらに深め、乳幼児・小児期の子どもたちの発育、発達を妨げる諸問題について様々な観点から、参与観察を通して深く学ぶ。また子どもの健康に関する支援的環境の具体的方法を、創造的かつ確かな情報に基づく議論ならびに現場でのフィールドワークを通して考える。			
授業計画 第1回：オリエンテーション：授業の概要 第2回：：受講者の学部において学んだ小児保健学の知識の整理 第3回：子どもたちの発育・発達を妨げる諸問題について：文献検索の方法、テーマの選択 第4回：資料収集とその分析に基づく討論①：子育て環境 第5回：子育て支援センターにおける健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第6回：資料収集とその分析に基づく討論②：生活習慣 第7回：家庭的保育室における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第8回：資料収集とその分析に基づく討論③：あそび・身体運動 第9回：保育所における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第10回：資料収集とその分析に基づく討論④：児童虐待予防 第11回：乳児院における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第12回：資料収集とその分析に基づく討論⑤：健康管理・健康教育・感染症対策 第13回：病児・病後児保育室における支援の在り方（参与観察） 第14回：レポートに基づく報告会（プレゼンテーション） 第15回：講義のまとめ			
準備学習： 子どもの保健の教科書を通読しておくこと。			
テキスト： 特に指定しない。			
参考書・参考資料等： 適宜、提示する。			
学生に対する評価： 文献の読解力30点。授業内での発表・討論などの平常点30点。課題に対するレポート提出40点。			

授業科目名：発達心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：野口隆子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>乳幼児の発達と家庭や社会・文化、保育・教育の場と実践に関する理論と調査の方法を理解し、研究を構想し実施する力を習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの発達と社会・文化との関連性について、発達心理学の主要な理論、方法論を取り上げて考える。子どもにとっての保育者や保護者、保育・教育場面や家庭場面の意味を理解し、学びを深めることで、具体的な関わりや援助を考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：発達心理学に関する文献の紹介</p> <p>第3回：研究計画と方法論の探究</p> <p>第4回：乳児期の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第5回：幼児期（前期）の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第6回：幼児期（後記）の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第7回：児童期の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第8回：児童期以降の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第9回：保育・教育場面の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第10回：家庭場面の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第11回：発達理論に関する文献購読と討議</p> <p>第12回：保育・教育理論に関する文献購読と討議</p> <p>第13回：調査方法に関する文献購読と討議</p> <p>第14回：質的研究法に関する文献購読と討議</p> <p>第15回：全体総括とまとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>各文献の担当者は、文献を読み、不明な点や関連する文献を調べてレジュメを作成して報告する。担当者以外の参加者は、討議に参加し、関連する文献を調べるなどして復習をする。</p>			
<p>テキスト：テキストは特に使用しない。適宜文献を紹介する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜文献を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レジュメとレポート（60%）、討議への参加等（40%）により評価する。</p>			

授業科目名： 子ども芸術療法特論	単位数： 2単位	選択 (幼専)	担当教員名：池森隆虎・ 保坂遊・佐藤邦子 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>様々な芸術療法の方法論、意義、効果について基礎的に理解し、それらと子どもの成長・発達や心身の健康との関わりを考えながら、教育・福祉・医療分野においてどのように活用することができるか、これからの社会を見据えた芸術の社会的貢献について考えることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>現代における様々な子どもの成長・発達や心身の健康に対して、芸術表現活動がどのような手法によってどのような効果をもたらすことができるのか、それぞれの専門分野の教員によるオムニバス授業より、音楽、美術、身体的表現活動を用いた多様なアプローチを理解する。また、芸術が子どもを取り巻く教育、福祉、医療といった社会的環境の中でどのように活用することができるかグループディスカッションを通して検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：様々な子どもと芸術療法 (池森 保坂 佐藤)</p> <p>第2回：アートセラピーの意義と効果 (保坂)</p> <p>第3回：様々な子どもに対するアート実践 (保坂)</p> <p>第4回：アートー医療ー福祉の関係と社会的意義 (保坂)</p> <p>第5回：アートセラピーの活用を考える (ワークショップ) (保坂)</p> <p>第6回：身体活動を伴う療法の実践例 (池森)</p> <p>第7回：身体活動を伴う遊びから目的と効果を考える (池森)</p> <p>第8回：療法としての遊びを実践する上で注意すべき点とは (池森)</p> <p>第9回：野外活動からの実践例 (池森)</p> <p>第10回：音楽療法の意義 (佐藤)</p> <p>第11回：音楽の効果 (佐藤)</p> <p>第12回：音楽療法の実際 目的と方法、対象者への配慮 (佐藤)</p> <p>第13回：音楽療法の活用を考える (ワークショップ) (佐藤)</p> <p>第14回：芸術の社会的貢献を考える (グループディスカッション) (池森 保坂 佐藤)</p> <p>第15回：まとめ (池森 保坂 佐藤)</p>			
<p>準備学習：予習・復習等ノート整理、大学学部における表現系授業を履修しており、履修前にそれらの復習をまとめていることが望まれる。[子ども芸術療法演習]を合わせて履修することが望まれる。</p>			
<p>テキスト：授業毎に配布</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業時に適宜、紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：平常点20%、小課題30%、レポート50%</p>			

授業科目名： 子ども芸術療法演習	単位数： 2単位	選択 (幼専)	担当教員名：池森隆虎・ 保坂遊・佐藤邦子 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>様々な芸術療法の基礎的な方法論や援助技術を習得し、それらを用いてどのように子どもの成長・発達、健康を促す表現活動を支援していけばよいのか、具体的な実践プランや社会的活動を検討し、計画・立案・実践するための基礎力を身につける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>音楽、美術、身体表現を活用した様々な子どもを対象とした芸術表現活動並びに芸術療法の基礎的な方法論や援助技術について理解を深める。各領域の専門分野教員によるオムニバス授業による実践的なアクティブラーニングを通して、現代社会が課題としている様々な子どもに対する教育方法や支援について芸術療法の技法をいかに活用していくことができるか、その方法や効果について具体的に理解し、実践方法や社会的活用法について検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：芸術療法の多様な実践 (池森 保坂 佐藤)</p> <p>第2回：子どもの感性を解放する臨床美術 (保坂)</p> <p>第3回：アートセラピーの様々なアプローチ (保坂)</p> <p>第4回：多様な子どもに対する援助について (保坂)</p> <p>第5回：子どもの表現を受け止め、評価する (保坂)</p> <p>第6回：身体活動を伴う遊びの実践1 動きで遊ぶ (池森)</p> <p>第7回：身体活動を伴う遊びの実践2 モノで遊ぶ (池森)</p> <p>第8回：身体活動を伴う遊びの実践3 環境づくり (池森)</p> <p>第9回：模擬野外活動 (池森)</p> <p>第10回：音楽療法的アプローチ ① 身体の動き (佐藤)</p> <p>第11回：音楽療法的アプローチ ② 声 身体の動き (佐藤)</p> <p>第12回：音楽療法的アプローチ ③ もの (佐藤)</p> <p>第13回：音楽療法的アプローチ ④ 個人とグループ (佐藤)</p> <p>第14回：芸術療法の実践プランニング (池森 保坂 佐藤)</p> <p>第15回：発表 まとめ (池森 保坂 佐藤)</p>			
<p>準備学習：予習・復習等ノート整理、大学学部における表現系授業を履修しており、履修前にそれらの復習をまとめていることが望まれる。[子ども芸術療法特論]を履修、修得していること。</p>			
<p>テキスト：授業毎に配布</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業時に適宜、紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：平常点20%、小課題30%、レポート50%</p>			

授業科目名：教育実践演習（国語）	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：阿部 藤子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>国語科教育の教科内容の歴史的変遷、および現代の国語科教育の学習内容や指導法を学び、実践現場での課題を考察する。「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の各領域における授業場面を想定しながら小学校における国語科の学習指導について理解を深める。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>国語科教育における教科内容と指導法について考察する。まず、国語科の授業の理論と歴史、現代に要請される国語学力、授業設計や授業実践のあり方について学ぶ。国語教育の実践家の著作や実践記録を講読する。さらに具体的な授業実践を取り上げて、授業を振り返りながら授業の力量を上げるための営みについても学び、研究的実践の創造をめざす。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：学生の研究関心や問題意識について発表、意見交換する。</p> <p>第2回：国語科教育の内容の歴史的変遷について考察する。</p> <p>第3回：これからの国語教育に求められる学力について考察する。</p> <p>第4回：「読むこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第5回：「話すこと・聞くこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第6回：「書くこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第7回：「知識・技能」に関する内容と指導法について考察する。</p> <p>第8回：実践家の著作や実践記録を読む①芦田恵之助</p> <p>第9回：実践家の著作や実践記録を読む②齊藤喜博</p> <p>第10回：実践家の著作や実践記録を読む③青木幹勇</p> <p>第11回：実践家の著作や実践記録を読む④大村はま</p> <p>第12回：国語科の授業の考察① 小学校低学年</p> <p>第13回：国語科の授業の考察② 小学校中学年</p> <p>第14回：国語科の授業の考察③ 小学校高学年</p> <p>第15回：学生のまとめの発表</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）：テキストや配付された資料を読んで重要事項や疑問点やなどを整理して授業に臨むこと。また各自の報告の準備をして授業に臨むこと。</p>			
<p>テキスト：澤本和子・授業リフレクション研究会（2016）「国語科授業研究の展開―教師と子どもの協同的授業リフレクション研究―」東洋館出版</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>国語教育実践理論研究会著「＜書く＞で学びを育てる―授業を変える言語活動構造図」（2014）東洋館出版社／国語教育実践理論会編「新提案 教材再研究―循環し発展する教材研究 子どもの読み・子どもの学びから始めよう」（2011）東洋館出版社／必要に応じて資料を配付する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>課題についてのレポート、発表、振り返りの状況で80%、平常点20%</p>			

授業科目名：教育実践演習（算数）	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：家田晴行
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> 具体的な算数の事例を基に、その授業における予想される児童の反応と対応策を考えることができる 			
<p>授業の概要</p> <p>授業における児童の「分からない」状況が、どのようなことに起因することなのか、またそのための対応策は如何にあるべきか、を究明することは実践研究者の永遠の課題でもある。児童が混乱をきたす典型的な算数科の課題について、その教材の分析や解釈を通して対応策や指導方法の工夫をゼミ形式で討論していく。また、実際の授業における検証を行っていくとともに、新しい指導法や教材開発の進め方等について探究する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：本講座の趣旨と進め方（目的と方法の確認）</p> <p>第2回：乗法の意味（累加と倍概念）の指導と関連性</p> <p>第3回：小数と分数の指導先行に関する考え方と扱い方</p> <p>第4回：量としての分数と数としての分数をまとめて指導することの意味</p> <p>第5回：分数×整数，分数÷整数先行とかけ算先行での取り扱いの違い</p> <p>第6回：筆算と暗算の意味の違いと取り扱う範囲</p> <p>第7回：量としての「角」と図形としての「角」の扱い</p> <p>第8回：三角形の面積の先行と平行四辺形の面積先行の指導の違い</p> <p>第9回：図形の概念形成と概念達成</p> <p>第10回：空間概念と空間観念の違いについて</p> <p>第11回：授業観察の手法と記録の仕方</p> <p>第12回：算数の授業観察の実際</p> <p>第13回：算数の授業の分析と討論</p> <p>第14回：改善指導案の作成と教材の開発</p> <p>第15回：まとめ（本講座における知見についての小論文作成）</p>			
<p>準備学習：授業前までにその回の講座の内容について調べてくること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>小学校算数「授業力をみがく」（啓林館）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>学習指導要領、小学校算数教科書「わくわく算数（啓林館）」 小学校算数教科書「新しい算数（東京書籍）」</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業構成や整理における討論の状況を3段階で評価する。 まとめにおける小論文に記述内容を3段階で評価する。 			

授業科目名：教育実践演習（社会）	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：二川正浩
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦後から今日に至る社会科教育の目標や内容、方法論の変遷についての考察を行い、今日の社会科教育の意義と課題について述べるができる。 ・地域素材の教材化を通して、児童が主体的に学ぶための授業構成の理論と方法、授業分析と評価の方法に関する教育実践の手法を身につけることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>戦後から今日に至る具体的な授業実践を取り上げながら社会科教育の目標や内容、方法論についての理解を深め、今日の学校現場における社会科教育の意義と課題についての考察を行う。次に、その課題の解決を念頭に、現行の学習指導要領の改定の趣旨を理解しながら、小学校社会科における授業構成の理論と方法について地域学習を事例としながら理解を図る。そして、これからの社会科教育の在り方について、授業分析や評価方法についての理論を通して、児童生徒の主体的な学びという観点からの考察を行いながら、教育現場において求められる研究的実践の手法を修得していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス 社会科の誕生と教育の目標</p> <p>第2回：学習指導要領に見る社会科の学習内容と方法の変遷</p> <p>第3回：初期社会科における教育実践</p> <p>第4回：初期社会科における教育実践の課題</p> <p>第5回：系統的な学習と社会科教育の授業構成の理論と方法</p> <p>第6回：ゆとり教育と社会科教育の授業構成の理論と方法</p> <p>第7回：新学力観と社会科教育の授業構成と理論の方法</p> <p>第8回：知識基盤社会で求められる社会科教育の在り方と課題</p> <p>第9回：現行の学習指導要領における社会科の改訂の趣旨</p> <p>第10回：現行の学習指導要領における小学校社会科の授業構成の理論と方法</p> <p>第11回：小学校社会科における地域学習の意義</p> <p>第12回：社会認識を育てるための地域素材の教材化による授業構成の理論と方法</p> <p>第13回：授業分析と授業の評価方法についての理論</p> <p>第14回：児童生徒の主体的な学びから見る社会科教育のこれからの課題</p> <p>第15回：本講義のまとめ</p>			
<p>準備学習：事前に提示する演習課題の予習1時間、演習課題の復習と整理1時間</p>			
<p>テキスト：</p> <p>日本社会科教育学会出版プロジェクト編「新時代を拓く社会科の挑戦」第一学習社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要に応じて参考書や参考資料を紹介、配布します。</p>			
<p>学生に対する評価： 予習・復習の有無20%、演習課題への取り組みなどの平常点40%、演習課題に対するレポート提出40%</p>			

授業科目名：教育実践演習（理科）	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：大澤力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本専攻における専門的知識修得のためのコースワーク授業及び研究の一環として小学校理科において自然とのかかわり、科学的なかかわり、生活とのかかわりを重視し、実感を伴った理解や問題解決の能力を育成し、生きる力を構成する「確かな学力・豊かな人間性・健康、体力」を養うことを目標とした授業展開に資する教科内容を実践し、探求できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>小学校「理科」の教育を通して子どもたちに育む「生きる力」の共通理解からはじめ、自然・科学・生活といった重要側面の把握、さらに基礎的・基本的知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成との関連も視野に入れつつ、A区分「物質・エネルギー」・B区分「生命・地球」の教科内容や各学年の教科内容に関する事項を学ぶ。教科内容の学びに関する筆記試験を実施し、学びを確認する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに：小学校「理科」のめざすもの—学習指導要領の方向性「生きる力」の育成 第2回：自然とのかかわり—自然とは・理科と科学と自然 第3回：科学的なかかわり—科学性の芽生えから科学活用的なかかわりの活用へ 第4回：生活とのかかわり—家庭生活, 学校生活, 社会生活・日常生活と理科 : まとめ 第5回：改定の基本方針と理科の関連：6つの基本方針に関する教科内容 第6回：2区分制：「物質・エネルギー」と「生命・地球」 第7回：領域構成：A区分「物質・エネルギー」の目標と教科内容 第8回：領域構成：B区分「生命・地球」の目標と教科内容 第9回：観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動を図る教科内容の展開 第10回：科学的な体験や自然体験の充実を図る教科内容の展開 : まとめ 第11回：環境保全の態度の育成に関する目標と教科内容の展開 第12回：第3学年の目標と教科内容 第13回：第4学年の目標と教科内容 第14回：第5学年の目標と教科内容 第15回：第6学年の目標と教科内容 : まとめ</p>			
<p>準備学習：予習・1時間 復習・毎授業後に、レポートを提出のこと</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「小学校 新学習指導要領 ポイントと授業づくり 理科」新世紀型理科教育研究会編著 東洋館出版社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>「小学校新学習指導要領の展開理科編」小学校理科実践研究会編著 明治図書・「新しい小学校理科授業づくりと教材研究」星野昌治編著 東洋館出版社・「子どもと環境」共著文化書房博文社</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業態度30%・提出物35%・筆記試験35%</p>			

授業科目名：教育実践演習（音楽）	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：笹井邦彦
授業の到達目標及びテーマ 音楽教育の意義と具体的な方法についての理解、グローバルな音楽教育			
授業の概要 子どもを取り巻く音楽環境は、社会の変化や文化の変化とともに複雑化してきている。例えば、公教育における明治以来の欧米音楽一辺倒から昨今での母国音楽教育の再導入、あるいは、マスメディアの発展とともに様々な音楽環境が存在している。つまり、これらのことは今の子どもたちと音楽との関わりを考えた場合、よりグローバルな視点からの考察が必要である。そのようなことから、ここでの演習は「日本の音楽の歴史的探求」あるいは「子どもたちの音楽環境の歴史的変遷」などのルーツを紐解きながら、今の子どもたちに対する音楽教育の在り方、及び本来的な音楽教育の在り方などについて探求する。			
授業計画 第1回：音楽科学習指導要領の変遷と解説 第2回：音楽科教育の歴史 第3回：世界の音楽教育（東洋編） 第4回：世界の音楽教育（ヨーロッパ編） 第5回：世界の音楽教育（アメリカ） 第6回：日本音楽の概観（古代期） 第7回：日本音楽の概観（中世期） 第8回：日本音楽の概観（近世期） 第9回：昭和以降の音楽 第10回：平成以降の音楽 第11回：音楽教育における公的教育と社会的教育 第12回：音楽療法の歴史と公教育 第13回：音楽教育の現況と課題 第14回：音楽教育の発展的考察 第15回：全体的考察と課題			
準備学習： 人と音・音楽の関わりについて論文等で調査しておく。			
テキスト： 適宜、プリントを配布する。			
参考書・参考資料等： 未定			
学生に対する評価： 授業参加意欲 レポート課題による			

授業科目名： 教育実践演習（図画工作）	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：結城孝雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>小学校課程における図画工作科を展開するための理念と方法を習得すること。 効果的な授業を展開するための素材と技法の知識を踏まえた上で、ワークショップを行い、実践できる基礎的な能力を身につける。また、鑑賞教育の意義と方法について、考察を深める。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本演習の目的は、小学校課程における図画工作科を展開するための理念と方法を習得することにある。美術教育史を背景に児童の造形表現と人間形成の関係を思索し、材料・素材の知識をもとに発達段階に応じたワークショップを行う。さらに、鑑賞教育の視点として、メディアリテラシーをふまえた視覚情報と造形表現の関係、活用のあり方を検討していく。方法として、講読、実技研究、ワークショップ美術館見学を行う。課題設定の上、受講者の報告、ワークショップでの実技実践をもとに行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回:オリエンテーション 美術教育の理念Ⅰモリスとチゼック 第2回:美術教育の理念Ⅱリードとローウェンフェルド 第3回:材料と素材Ⅰ描画素材 第4回:材料と素材Ⅱ用紙各種と和紙 第5回:材料と素材Ⅲ粘土、彫塑、工具と道具 第6回:work shopに向けたオリエンテーション 第7回:work shopⅠ「描画素材」に着目して 第8回:work shopⅡ「紙」に着目して 第9回:work shopⅢ「木材」に着目して 第10回:work shopⅣ「粘土」に着目して 第11回:work shopⅤ「新素材」に着目して 第12回:鑑賞教育とメディアリテラシー 第13回:フランス『芸術史“<i>Histoire des Arts</i>”』の実践研究 第14回:美術館見学の研修 第15回:鑑賞のまとめ-全体講評</p>			
<p>準備学習：</p> <p>毎回、課題（次回に向けて）が出されますので、行うように。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>拙著『つくるたのしむ』草土文化 2006</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>『新版美術教育の基礎知識』建帛社 2008</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業目標を基準とし、授業での参加態度・意欲、提出レポートの内容から創造的活動を行った学生に高い評価を与える。</p>			

授業科目名： 教育実践演習（家庭）	単位数：2単位	選択 （小専）	担当教員名：平野 順子
授業の到達目標及びテーマ 家庭科は、生きる力を育成する教科として期待されている。どのような授業構成によって、児童の生きる力を育成できるのか。どのような教材や地域資源の活用ができるのか、自分で考えて授業計画を立てられることが目標である。			
授業の概要 家庭科の分野の中でも、主に家族・福祉・公共・消費の分野を取り上げ、学生の準備学習をもとに、よりよい授業づくりのために討論を行う。最後には、実践計画を立て、発表・議論を行う。			
授業計画 第1回：オリエンテーション（授業の進め方と学生の興味関心について） 第2回：現在の家庭科を取り巻く環境と問題点、課題 第3回：学習指導要領と家庭科に求められること 第4回：児童を取り巻く環境と問題点、課題 第5回：家庭科の学びの特徴と、それに基づく学習法 第6回：教材研究 ①教材の検討 第7回：教材研究 ②web教材の検討 第8回：地域との連携の可能性 ①子育て支援施設を巡る 第9回：授業実践発表（1）第5学年 ①指導案の提案（発表、討論） 第10回：授業実践発表（2）第5学年 ②指導案の修正（発表、討論） 第11回：地域との連携の可能性 ②地域施設を巡る 第12回：地域との連携の可能性 ③施設との連携方法 第13回：授業実践発表（2）第6学年 ①指導案の提案（発表、討論） 第14回：授業実践発表（2）第6学年 ②指導案の修正（発表、討論） 第15回：まとめ			
準備学習（予習・復習等） 基本的に、毎回、授業の準備学習（課題、発表準備）があります。その準備をもとに討論によって授業を進めますので、必ず準備をしてください。			
テキスト 授業中に指定します			
参考書・参考資料等 授業中に指定します			
学生に対する評価 毎回の授業の準備、発表（50%）、授業での討論（20%）、実践発表（30%）の総合評価			

授業科目名：教育学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：藤井穂高
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>今日の代表的な学力（コンピテンシー）論を理解し、今後の学校教育において育成すべき学力（コンピテンシー）の中味を考えることができること。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>今日の学校教育をめぐる改革の論点の1つは学力（コンピテンシー）の問題である。しかし、肝心の学力については諸説が混乱しており必ずしも整理されていない。そこで本講義では、今日の代表的な学力論をいくつか取り上げ、その意義と有効性を吟味するとともに、今後の学校教育（幼児教育も含む）において育成すべき学力の中味を考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション(本講義のねらい、内容、資料等についての説明と確認)</p> <p>第2回：これまでの学力論①（教育課程論の研究から）</p> <p>第3回：これまでの学力論②（教育心理学の研究から）</p> <p>第4回：今日の学力低下論①（学力低下論の出現とそのインパクト）</p> <p>第5回：今日の学力低下論②（学力低下論の展開）</p> <p>第6回：今日の学力論①(学力低下論への反論)</p> <p>第7回：今日の学力論②(今日の我が国の研究動向)</p> <p>第8回：今日の学力論③(教育社会学からの論争の整理の試み)</p> <p>第9回：今日の学力論④(教育心理学からの論争の整理の試み)</p> <p>第10回：国際的な学力比較研究の意義①（TIMSSの意味と内容）</p> <p>第11回：国際的な学力比較研究の意義②（PISAの意味と内容）</p> <p>第12回：国際的な学力比較研究の意義③（その他の国際調査からの示唆）</p> <p>第13回：国際的な学力比較研究の意義④（キー・コンピテンシーの意味と内容）</p> <p>第14回：国際的な学力比較研究の意義⑤（国際的な視野で見た我が国の学力）</p> <p>第15回：講義のまとめとレポートの提出</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業前には必ず配布した資料をよく読み、論点を準備しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>毎回の講義で資料を配付する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>参考文献等も配付資料で指示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>出席、演習課題、最終レポートの3面から評価する。全回数の2/3以上の出席を条件に評価する。評価割合は、授業への参加態度30%、演習課題30%、最終レポート40%とする。</p>			

授業科目名：教育行政学特論	単位数：2 単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：貝ノ瀬 滋
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>生涯学習の推進などを中核とした教育機関の仕事等を理解し、直面する教育課題を理解し、その解決にあたり、自分の考えを述べることができる能力を養う。</p>			
<p>授業の概要：幼稚園、学校や教育委員会における具体的な課題解決の事例を通して、教育行政の役割や教育課題について総合的に理解し、議論する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：学習計画・オリエンテーション</p> <p>第2回：幼稚園教育要領、学習指導要領と教育課程</p> <p>第3回：演習（課題設定）</p> <p>第4回：演習（討論・発表）</p> <p>第5回：教育委員会と地域及び家庭教育</p> <p>第6回：演習（課題設定）</p> <p>第7回：演習（討論・発表）</p> <p>第8回：幼・保・小の連携とその意義</p> <p>第9回：演習（課題設定）</p> <p>第10回：演習（討論・発表）</p> <p>第11回：学校・家庭・地域との連携と協議</p> <p>第12回：演習（課題設定）</p> <p>第13回：演習（討論・発表）</p> <p>第14回：講義「日本の教育改革と展望」</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>新教育課程の概要について、文科省のHP等に目を通りておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「図説コミュニティ・スクール入門」（一芸社）貝ノ瀬滋著</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>学習指導要領、教育小六法、幼稚園教育要領</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レポート、事例発表及び討議への参加状況を加味し評価（平常点 20%小課題 30%レポート 50%）</p>			

授業科目名：教育心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ： 現代の教育に関する諸課題について、心理学的な用語や理論を適切に用いて把握し、課題解決に向けて具体的なレベルで対応策を案出できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「教育」とは一定の方向性を持った価値に基づいた活動である。それに対して、科学性を標榜する「心理学」がどのように関与しうるのかを考えていく。児童学児童教育学専攻の学位授与の方針に基づき、この授業では、まず心理学・教育心理学の基礎事項の講義を行い、心理学の基本的な考え方を身に付けた上で、教育に関する報道を分析したり、「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）や「児童心理」（金子書房）、「指導と評価」（図書文化社）などの教育雑誌の論文を読み解いたりしながら、教育心理学の実践的な理解を深めていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：心理学の基礎講義Ⅰ（歴史）</p> <p>第3回：心理学の基礎講義Ⅱ（理論と方法）</p> <p>第4回：教育心理学の基礎講義Ⅰ（歴史）</p> <p>第5回：教育心理学の基礎講義Ⅱ（理論と方法）</p> <p>第6回：子どもの教育心理学的理解①（発達の把握と対応）</p> <p>第7回：子どもの教育心理学的理解②（学習の指導と評価）</p> <p>第8回：子どもの教育心理学的理解③（臨床的課題の把握と対応）</p> <p>第9回：子どもの教育心理学的理解④（心身の障害についての把握と対応）</p> <p>第10回：子どもの教育心理学的理解⑤（心身の障害に関する現代的問題）</p> <p>第11回：第1回～第10回までのまとめ</p> <p>第12回：演習①：教育問題に関する「新聞報道」を分析する。</p> <p>第13回：演習②：教育問題に関する「雑誌報道」を分析する。</p> <p>第14回：演習③：教育問題に関する「インターネット情報」を分析する。</p> <p>第15回：全体のまとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。※週3時間程度の学習。</p>			
<p>テキスト：授業期間直前または授業期間中に出版された最新・最適なテキストを指定する予定である。</p>			
<p>参考書・参考資料等：「日本を滅ぼす教育論議」（講談社現代新書）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点とレポート等課題を総合的に評価する。議論への参加状況（50%）、レポート等課題（50%）で評価する。評価に関連するフィードバックは、授業内で適宜行う。※必要に応じて、試験を課す場合もある。</p>			

授業科目名：学級経営特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：家田晴行
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級担任ではない院生にも、学級経営のポイントと工夫を盛り込んだ学級経営案を作ることができるようにする。 			
<p>授業の概要</p> <p>学級崩壊や不登校・いじめ、校種間の接続問題など、学級を取り巻く課題は山積している。本講では、前半にこうした様々な課題に対してどのように対処し、解決を図っていくかを具体的な事例を通して討論を行う。その上で後半は、望ましい学級経営を進めて行くにはどのような配慮や工夫を重ねていくかを、具体的な経営案作成を目指した演習を重ねる。また、必要に応じて優れた学級経営を進めている教育現場を視察し、その経営のポリシーや技法を具体的に学ぶことができるようにする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：本講座の趣旨と進め方について（目的と方法の確認、協力校への依頼）</p> <p>第2回：学級を取り巻く課題の概観（学級崩壊、不登校・いじめ、小1問題等）</p> <p>第3回：様々な問題についての討論(1)（学級崩壊の実状と対応策）</p> <p>第4回：様々な問題についての討論(2)（不登校・いじめの実状と対応策）</p> <p>第5回：様々な問題についての討論(3)（小1問題の実状と対応策）</p> <p>第6回：様々な問題についての討論(4)（小学校高学年女子問題の実状と対応策）</p> <p>第7回：様々な問題についての討論(5)（モンスターペアレンツの実状と対応策）</p> <p>第8回：様々な問題についての討論(6)（問題行動の実状と対応策）</p> <p>第9回：学校視察(1)（優れた学級経営を行う教諭の学級観察①）</p> <p>第10回：学校視察(2)（優れた学級経営を行う教諭の学級観察②）※①②は別の学級</p> <p>第11回：学級経営案の作成についての討論(1)（目的と方針についての確認）</p> <p>第12回：学級経営案の作成についての討論(2)（実態の把握の方法とその分析）</p> <p>第13回：学級経営案の作成についての討論(3)（学級経営案での工夫・配慮事項の検討）</p> <p>第14回：学級経営案の作成についての討論(4)（想定される課題への対応策の検討）</p> <p>第15回：まとめ（知見を整理し、小論文にまとめる）</p>			
<p>準備学習：</p> <p>予習として、事前に渡す論文、報告書等を読んで内容を解説できるようにしておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>毎回、必要に応じて用意する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>「切り抜き速報・教育版」等の情報誌からプリントする</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な課題に対するレポートと討論の状況について評価する。 ・本講座における知見をまとめた小論文の記述内容を評価する。 			

授業科目名： 道徳教育演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：走井洋一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本演習では、道徳性を広く社会性と捉え直し、社会性の形成とその教育に関わる諸問題について取り組むことで以下のことができるようになることを目指す。</p> <p>①社会性の形成の前提となる世界観の多様性を理解するとともに、子どもたちとともに自らが生活する社会のあり方を構想できること</p> <p>②社会性の形成の前提となる子どもの発達・形成の有り様と現状を正しい理解すること</p> <p>③種々の教育方法についてのメリット・デメリットを理解するとともに、子どもの発達・形成の有り様に最適化された教育方法を構想できること</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの社会性の形成を支援するためには、世界観（何を正しいと考えるのかについての多様な見方）、子ども観（子どもを白紙とは見ずに、ヒトとしての特性を把握したうえで、その発達・形成の有り様と現状を理解すること）、教育方法観（これまで取り組まれてきた教育方法とその理論的反省）を踏まえることが求められる。これらについて取り組むことを通じて、子どもの社会性の形成を支援する際の教師のもつべき視座の獲得を目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：教育を研究することはどういうことなのか？ 学習と教育の差異を中心に</p> <p>第2回：社会性の形成の前提となる世界観①—義務論</p> <p>第3回：社会性の形成の前提となる世界観②—帰結主義ないしは功利主義</p> <p>第4回：社会性の形成の前提となる世界観③—リベラリズム・リバタリアニズム</p> <p>第5回：社会性の形成の前提となる世界観④—共同体主義</p> <p>第6回：社会性の形成の前提となる世界観⑤—地域主義</p> <p>第7回：社会性の形成の前提となる子ども観①—ピアジェの発達段階説とその問題</p> <p>第8回：社会性の形成の前提となる子ども観②—道徳性の発達学説の諸相（ブル、コールバーグ）</p> <p>第9回：社会性の形成の前提となる子ども観③—進化論的心理学が示す社会性の形成</p> <p>第10回：社会性の形成の前提となる子ども観④—子どもが置かれている社会的状況と諸問題</p> <p>第11回：社会性の形成の前提となる教育方法観①—指導と放任</p> <p>第12回：社会性の形成の前提となる教育方法観②—道徳教育の方法概説</p> <p>第13回：社会性の形成の前提となる教育方法観③—問題解決的学習</p> <p>第14回：社会性の形成の前提となる教育方法観④—体験的学習</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>テーマに関する文献・論文等を事前に読み、要点をまとめたいうえで、論点を提示することを要する。また、大学の教職課程における教育原理（東京家政大学においては「教育概論Ⅰ・Ⅱ」）、道徳の指導法（東京家政大学においては「道徳教育の研究」ないしは「道徳基礎研究」「道徳指導法」）の内容に習熟することが望ましい。</p>			

テキスト：

使用しないが、必要に応じてプリントを配布する。

参考書・参考資料等：

参考書・参考資料は必要に応じて提示する。

学生に対する評価：

事前学習を含めた授業における取り組み（60%），最終課題レポート（40%）

授業科目名：特別支援教育演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：半澤嘉博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>障がいのある児童生徒に対する特別支援教育の在り方についての現状を把握し、基本的な認識を持つ。また事例研究を中心に、個別の支援計画を活用した具体的な支援の在り方について考察する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>小学校における発達障害を含め、様々な障害のある児童への教育は、個別の教育ニーズに応じた支援や指導という視点が大切である。また、障害者の権利条約の批准に向けてのインクルーシブ教育の視点からの合理的配慮や障害理解が重要である。このような状況から障害のある児童への専門的な指導や個別の指導計画の作成・実施、関係機関との連携等を効果的に行うことができる教員の資質向上が求められるため、知的障害や発達障害の事例を基に、演習を通して具体的な支援等の在り方を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：特別支援学校における障がいのある児童の実態把握</p> <p>第2回：個別の指導計画、個別の教育支援計画の作成</p> <p>第3回：教材・教具の作成</p> <p>第4回：障がいのある児童の指導実践（1）及び評価（知的障害）</p> <p>第5回：障がいのある児童の指導実践（2）及び評価（肢体不自由、病弱）</p> <p>第6回：障がいのある児童の指導実践（3）及び評価（視覚障害、聴覚障害）</p> <p>第7回：指導実践の報告、事例検討</p> <p>第8回：通常の学級における障がいのある児童の実態把握（発達障害を中心に）</p> <p>第9回：個別の指導計画、個別の教育支援計画の作成</p> <p>第10回：教材・教具の作成</p> <p>第11回：障がいのある児童の指導実践（1）及び評価（LD）</p> <p>第12回：障がいのある児童の指導実践（2）及び評価（ADHD）</p> <p>第13回：障がいのある児童の指導実践（3）及び評価（高機能自閉症、アスペルガー症候群）</p> <p>第14回：指導実践の報告、事例検討</p> <p>第15回：まとめ（最終レポート）</p>			
<p>準備学習：</p> <p>特別支援学校学習指導要領を読んでおくこと。</p>			
<p>テキスト</p> <p>特になし。</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>必要な資料は適宜配布する。</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>課題演習、最終レポートの2面から評価する。評価割合は、演習課題50%、最終レポート50%とする。</p>			

授業科目名：情報処理演習 I	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：織田正昭
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>進歩が速い現代 I T 社会では様々な情報を取捨選択し、また作成したデータを科学的に分析処理する能力が求められる。本専攻の院生には特に子どもの生活と環境、健康状態、学習の習熟状況など学校・園の内外の情報を正確に収集し、それらを統計的に処理しその結果をきちんと理解できるようにする。また最近特に問われる情報セキュリティを含めた情報倫理についてもきちんと理解できるようにするとともに、I T 社会の子どもたちに数値や画像を用いた情報に興味関心を持たせられるようにするだけの能力を本演習を通して養う。本授業ではこれらを念頭に置き、児童教育学専攻の院生にふさわしい情報処理能力習熟し、以って修士論文研究の際に出てくる様々な情報をきちんと処理できることを目指し。更に受講生自身が教育現場で実際に活用できる応用能力を学ぶ。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本演習の柱はパソコン（P C）を用いた基本的データ処理操作とデータの統計処理技術である。はじめに園児模擬データを用いて情報処理演習の基本知識と演習技術の概要を学ぶ。前者はデータ入力・表計算などの基礎となるもので、児童・幼児の教育現場では必須の技術である。後者はデータを科学的に分析し処理し判断するための基本技術であり、変化が激しい現代 I T 社会の中で、園児児童に関する情報を科学的に処理し分析する技術である。児童園児に関する情報はプライバシーにかかわるものが多く、ウイルスセキュリティ対策と情報倫理にも重点を置く。以って修士論文研究のデータ処理の理論と技術の両方を習得する。</p> <p>その他：使いなれた自分のパソコンを持参して演習にのぞんでも良い。演習時間外にもメールで課題等の連絡をする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第 1 回：情報処理演習概論：パソコンの構成と機能、ネットワーク管理、プログラム言語論 第 2 回：園児・児童の基礎情報（模擬）データベースの作成～文字入力の基礎 第 3 回：園児・児童データを用いた表計算の基礎技術と応用（1）～データの簡易計算 第 4 回：園児・児童データを用いた表計算の基礎技術と応用（2）～グラフ作成 第 5 回：園児・児童の情報の統計的処理とその理解（1）（記述統計学、推計学） 第 6 回：様々な子ども関連情報の統計的比較とその理解（2）（統計的検定） 第 7 回：多次元データの多面的理解（1）～多変量解析（重回帰） 第 8 回：多次元データの多面的理解（2）～多変量解析（判別、主成分ほか） 第 9 回：学校・園、クラス、個人レベルでのホームページ作成の基礎と演習 第 10 回：園や学校の個人情報の安全管理(1)～P C ウイルス対策 第 11 回：園や学校の個人情報の安全管理（2）～情報倫理 第 12 回：P C メールを用いた情報のやり取りと加工、安全確認 第 13 回：インターネット情報の取捨選択～園児・児童関連データをネットで取り出して比較</p>			

第 14 回：非文字情報（画像、色、音など）のデータ処理の基本と活用

第 15 回：PowerPoint を使った情報処理演習のまとめと活用（討論）

準備学習

演習内容の復習をきちんと行ってわからない点を明らかにしておくとともに、毎回出される課題について、PCを使って行き次回に提出できるようにしておく。予習は特に求めないが、復習と課題については、2～3時間程度は費やして、授業に望んで欲しい

テキスト 資料配布 必要に応じてその都度、補足資料を配布

参考書・参考資料等 PC操作など基本的な関連図書、統計学の基礎に関する推薦図書を指示する

学生に対する評価：評価割合：平常点40%、演習課題40%、最終レポート20%とする。課題についてはその都度評価しフィードバックする。

授業科目名：情報処理演習Ⅱ	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>①情報を適切に検索する能力をつける、②電子媒体と紙媒体での情報読解の相違を理解する、③電子媒体の分かりやすい表現の技術を身に付ける、という3点を到達目標とし、これらをこどもに指導する方法について理解を深めることをテーマとする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童学児童教育学専攻の学位授与の方針に基づき、「情報処理演習Ⅱ」においては、パーソナル・コンピュータ及びインターネットを教育に活用する技術・方法を、①情報の「検索」、②情報の「読解」、③情報の「表現」の3つのポイントから、実践的に身に付ける。さらに、こどもに情報の検索や読解、表現を指導する場合の効果的な手法について学び、その際に浮かび上がる種々の問題点を考える。そして、ディスカッションを通じて、今後に生じうるであろう諸課題について検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション：「情報処理演習Ⅱ」の目的と演習の概要説明</p> <p>第2回：情報の検索①：情報検索の高度な方法</p> <p>第3回：情報の検索②：検索で得られた情報の評価</p> <p>第4回：情報の検索③：こどもに対する情報検索の指導方法</p> <p>第5回：情報の検索④：①～③に関するディスカッション（今後の課題について）</p> <p>第6回：情報の読解①：電子媒体と紙媒体の長所・短所</p> <p>第7回：情報の読解②：電子媒体での読解の特徴について</p> <p>第8回：情報の読解③：電子情報のクリティカル・リーディングについて</p> <p>第9回：情報の読解④：こどもに対する電子情報の読解指導方法について</p> <p>第10回：情報の読解⑤：①～④に関するディスカッション（今後の課題について）</p> <p>第11回：情報の表現①：電子媒体での表現における著作権について</p> <p>第12回：情報の表現②：「ワード」を用いた効果的な情報の表現</p> <p>第13回：情報の表現③：「パワーポイント」を用いた効果的な情報の表現</p> <p>第14回：情報の表現④：こどもに対する電子情報の表現指導方法について</p> <p>第15回：情報の表現⑤：①～④に関するディスカッション（今後の課題について）</p>			
<p>準備学習：各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。※週3時間程度の学習。</p>			
<p>テキスト： 授業期間直前または授業期間中に出版された最新・最適なテキストを指定する予定である。</p>			
<p>参考書・参考資料等：内容に応じ、「指導と評価」（図書文化社、2008年4月号～2010年3月号）の「ネット時代の読書論」の中から参考になる部分を配付する予定である。※演習参加者が用意する必要はない。</p>			

学生に対する評価：

平常点とレポート等課題を総合的に評価する。課題への取り組み状況（50%）、レポート等課題（50%）で評価する。評価に関連するフィードバックは、授業内で適宜行う。※必要に応じて、試験を課す場合もある。☆演習内容は高度になる。予習・復習を必ず行うこと。課題も多く出す予定であるので、単位取得のためには十分な努力が求められる。

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：10単位	必修	担当教員名：21名
<p>授業の概要（研究指導は、3科目のうち1科目を選択必修。） 児童学、児童教育学に関する研究の実践、指導を行い、またこれらについて論文指導を行う。</p> <p>（戸田雅美） 保育行為の判断の根拠について検討することを中心とする研究を行う。具体的には、実践事例を基にした研究や保育者を対象とする実践についてのインタビュー研究を行う。</p> <p>（家田晴行） 小学校算数科における学習上の諸課題について、問題の発見の仕方、解決のための手順の構築方法、様々な処理の方法、分析や考察・討論の方法など実践的な研究を進める。</p> <p>（岩崎美智子） 子どもと家族に関わる問題、子育て支援、保育者に関する事柄を中心に研究指導をおこなう。ゼミでは、学生による報告と討議を中心とし、授業担当者は論文執筆に対する助言指導をする。</p> <p>（榎沢良彦） 子どもや保育者の生を理解することを通して、保育実践(子ども同士、子どもと保育者の関わり)における本質や普遍性を捉えるための指導を行う。</p> <p>（大澤力） 幼児期自然教育でビオトープ・飼育栽培・里庭などを活用した科学性の芽生えを促進する課題の研究指導を行う。</p> <p>（笹井邦彦） 幼児期、児童期を中心に人と音楽の本来の関わりを探求する。具体的には、胎児期～児童期の音や音楽に関する発達研究、音楽療法、音楽教育の歴史研究、編曲・作曲研究、即興演奏研究を行う。</p> <p>（高野貴子） 疾病・障害のある子どもの発育、発達に関する実践的研究、保育・医療・福祉の連携などの調査研究を行う。</p>			

(走井 洋一)

子どもの社会性（道徳性，キャリア）の形成およびその支援の在り方についての理論的研究を行う。大学院生による主体的な取り組み（報告）と授業担当者の助言によって進める。

(花輪 充)

本研究は、演劇と教育をテーマとし、演劇的手法を活用した表現活動の教育的意義とその効果を探究する。具体的には、幼児期から児童期にかけての取り組みや、演劇教育の歴史的変遷、構成・演出等指導法について実践的研究を進める。

(半澤嘉博)

小学校において発達障害等により学習や生活面で個別の支援が必要な児童が増えてきている。学級担任として学級経営、学習指導、環境整備等、どのように工夫・配慮していくかを課題として研究する。

(平山祐一郎)

心理学的な事例研究法及び調査研究法によって、幼児期・児童期・青年期の学習活動または言語活動について、その発達の様相を記述する、あるいは教育的介入の効果を検討する研究指導を行う。

(宮島 祐)

本研究では発達障害（神経発達症群）の概念に至った経緯、および保育・教育の現場で問題となっている現状を鑑み、事例を交えての理解と対応について学びを深め、関心あるテーマに沿って必要な情報収集、調査研究、論文作成指導を行う。

(結城孝雄)

本研究では、今日的な情報機器を活用することで、研究に必要な情報を収集する能力を培い、研究の命題に応じた論の構築と情報・資料の活用を習得することを目的とする。

(阿部 崇)

障害者スポーツ、障害のある子どもの運動あそびについて研究を深める。先行研究で明らかとなったこと、明らかとなっていないことを明確にしながら、独自の研究に取り組む。

(是澤優子)

資料や文献などを用いた文献研究の手法を用いて、児童文化史、児童文化観などの課題に関する研究指導を行う。

(武田洋子)

園や子育て支援関連機関で、保育者が行う保護者支援（家族への支援）に関して探求する研究への指導を行う。

(野口隆子)

乳幼児期の発達と社会・文化との関連、保育・教育実践との関連について探求するため、発達研究の方法論を理解し、報告と討議を重ね、研究指導を行う。

(野澤純子)

知的障害や発達障害のある乳幼児の発達や特別支援教育に関して、調査研究や心理・教育的視点からの実践研究を行う。

(細井香)

子ども支援、保護者支援の視点から、子どものライフスタイルや健康、子どもを取り巻く環境等の実態を調査し、子どもの健やかな育ちを守るための支援的環境の在り方に関する研究指導を行う。

(堀 科)

乳幼児期の発達の特徴をふまえ、保育における生活と遊びの援助のあり方を課題として研究指導を行う。

(森田浩章)

児童文化における具体的な実践研究、特に、幼児の演劇、ペープサート、影絵、アニメーション等の事例研究を行う。また、児童文化を広く「子どもと文化」と、とらえ、大人社会と「子ども世界」を考えることも目的の一つである。

授業科目名：研究指導 保育実践研究	単位数：4単位	必修	担当教員名：1名
<p>授業の概要（研究指導は、3科目のうち1科目を選択必修。） 保育実践に寄与する、子ども理解の在り方、保育方法の開発、カリキュラムとその評価の在り方、クラス経営、園経営等について、実践的に研究する。</p> <p>（戸田雅美）</p> <p>主に、幼稚園、保育所、認定子ども園における、子ども理解の在り方とその実践的意味、保育実践方法、環境構成、カリキュラムと評価等について、テーマを設定し、実践的な研究をしていく。</p>			

授業科目名：研究指導 教育実践研究	単位数：4単位	必修	担当教員名：5名
<p>授業の概要（研究指導は、3科目のうち1科目を選択必修。） 現在、小学校教育は、地域や保護者との連携、生徒指導の在り方、適切な学級経営、確実な学力を身につける授業、効果的な学校評価など様々な課題を抱えている。これらの現状分析と解決方法を実践的に研究していく。</p> <p>（家田晴行） 算数における問題解決的な学習の進め方の中から、児童の反応の見取り方や適切な対応の仕方、反応の構成の方法などについて実践的な立場から授業を組み立てられるようになるための研究を行う。</p> <p>（笹井邦彦） 音楽指導者としての資質を高める実践を行う。伴奏法、編曲・作曲法、即興演奏法を実施する。</p> <p>（半澤嘉博） 授業の歴史と理論、学級と学級集団、授業と学力の形成等について学んだ上で、指導計画、授業の目標と内容、学習指導案、授業の分析と評価の方法の視点から授業の構成を考察していく。</p> <p>（結城孝雄） 本研究の目的は、変化する児童の実態に合わせて、教育効果のあるカリキュラムを構築することを目的とする。そのために、児童観察、教材分析、指導方法、授業研究、実践分析を通して授業実践の質を高め、児童の利益に適う学習課程を創造する。</p> <p>（阿部藤子） 国語科教育と授業研究の動向に関する論文、論考の講読を行う。並行して授業の実際の参観、ビデオ視聴を通して、国語科の教材、指導法、授業研究法について学ぶ。学生の研究の焦点化と裾野を広げることの双方をめざし、そのための知識獲得、研究課題の追求に資するよう支援していく。</p>			